

2017年6月1日

みずほディーラーズアイ (2017年6月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 108.00 ~ 114.00

国際為替部 為替営業第二チーム 森谷 友一

■ 先月の為替相場

先月のドル/円相場は前半から中旬にかけて上昇するも、後半にかけては米政治リスクの高まりを背景にその上昇分を打ち消す展開となった。

月初1日、111円台前半でオープン。米上下両院が歳出法案で暫定合意したと報じられたことなどから111円台後半まで上昇。2日、前日の流れを引き継いで112円台を回復。3日、FOMC声明文において「1～3月期の景気鈍化は一時的である可能性が高い」とされたことが材料視され112円台後半まで上昇。4日、仏大統領選挙候補者の世論調査においてマクロン氏優勢と伝わり、ユーロ/円の上昇に連れてドル/円も113円台前半まで上昇した。しかし、原油価格の急落を背景にリスクオフの動きとなり、5日は112円台前半まで下押しされた。米4月雇用統計はまちまちな結果となったが、6月利上げ期待を剥落させるものではないとの見ことから、ドル/円は底堅い推移となり112円台後半で越週した。第2週初8日、7日に実施された仏大統領選挙において親EU派のマクロン氏の勝利が報じられ113円台まで上昇。9日～10日にかけては米金利の上昇を背景としたドル買いが強まり月高値となる114.38円をつけた。11日は北朝鮮が弾道ミサイルテストを行うとの報道などを背景に一時113円台半ばまで下落。12日は米4月小売売上高の弱い結果を受けてドル売り優勢となり113円台前半で越週した。

第3週初15日、サウジアラビアとロシアが原油の協調減産延長で合意と報じられ113円台後半まで上昇。16日はトランプ米大統領の情報漏えい疑惑が報じられリスク回避の動きが強まり113円を下抜け。17日もドル売りの流れが継続し110円台後半まで急落すると、18日はトランプ陣営が大統領選挙期間中にロシア当局者と接触した可能性が報じられ月安値となる110.24円をつけた。その後は良好な米経済指標の結果を受けて111円台後半まで反発した。19日は米政治リスクへの警戒感が残る中、上値重い推移となり111円台前半で越週した。第4週初22日、前日に北朝鮮によるミサイル発射実験を受けリスク回避の動きとなり110円台後半まで下落。23日から24日にかけては米金利の上昇に連れて112円台後半まで上昇。しかし、FOMC議事要旨では一部にハト派な表現があったことから再び111円台半ばまで下落した。25日はブレインードFRB理事のタカ派発言などを受けて111円台後半まで反発。26日は原油価格の下落などを背景にリスク回避の動きが強まり111円台前半で越週した。第5週初29日、米英が休場となる中、111円台前半での小動きとなった。30日は冴えない米経済指標の結果等を受けて110円台後半まで下落。31日は方向感に乏しい推移となり110.78円で越月した。

■ 今月の見通し

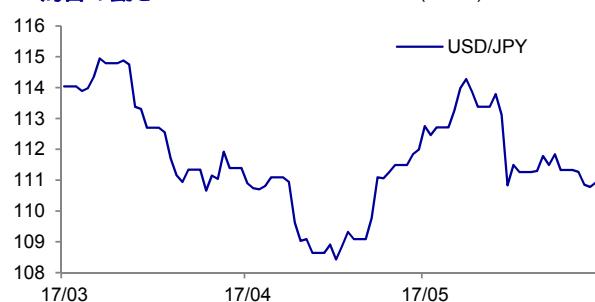
今月のドル/円相場は上値の重い推移を予想する。先月は9日にトランプ大統領がコミーFBI長官(当時)を突然解任したことをきっかけにロシアゲート問題が浮上。トランプ大統領の弾劾観測までもにも発展することとなり、月半ばから後半にかけては大きくドル売りが進行する展開となった。一旦米政治リスクに対する警戒感を背景としたドル売りは和らいだ印象があるものの、一連の報道を受けてトランプ政権の先行き不透明感が改めて市場で認識される格好となったと言える。新規材料が飛び出すまでは、米政治リスクの高まりを要因としてドルが大きく売り込まれることは想定しづらい状況とはなっているが、同様の問題が再び浮上するとの警戒感はすぐに払拭されるものではないだろう。また、先月23日にはトランプ政権が予算教書を提出したが、その内容は共和党内からも批判を浴びるものであり実現可能性には疑問が残るものとなった。トランプ大統領が掲げてきた減税や財政政策改革が一段と後ずれするとの見方も出ており、引き続き米政治リスクの高まりはドル/円の上値を押さえる要因として意識されるだろう。

米国金融政策に目を向けると、13日～14日にFOMCが開催される。5月24日に公表されたFOMC議事要旨(5月2日～3日開催分)では、「利上げに向けては最近の弱含みの経済指標が一時的とのさらなる証拠を待つのが賢明」との記載があり、ややハト派な内容と捉えられたものの、6月利上げについてはほぼ確実と見られている状況。FOMC会合までの間に発表される2日(金)の米5月雇用統計などの重要指標において、よほど失望的な結果とならない限りは6月利上げ期待が大きく後退することは想定しづらく、FOMCまでは利上げ期待がドル/円を下支えすることとなり得るだろう。しかし、マーケットにおいて既に6月利上げは相応に織り込みが進んでいることを踏まえると、6月利上げ期待を材料視しての大幅な上昇は見込みづらいと言える。市場予想通り利上げに踏み切れば、今後の利上げペースやバランスシート縮小を巡る議論に注目が集まることとなりそうだが、米政治リスクに加えて、米国経済に対する警戒感もやや高まっている印象のある状況下、利上げ決定後は一旦は材料出尽くし感からドル売りで反応する可能性が高いと考えている。

以上を勘案すると、先月同様に6月利上げ期待がドル/円をサポートする局面は見られると考えられるものの、力強い上昇は見込みづらく上値の重たさが意識される展開を予想する。

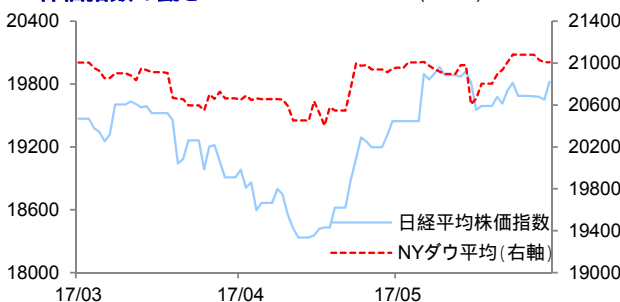
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/1	ISM製造業景況指数	4月	56.5	54.8	57.2
5/3	ISM非製造業景況指数	4月	55.8	57.5	55.2
5/3	FOMC政策金利		0.75%～1.00%	0.75%～1.00%	0.75%～1.00%
5/5	非農業部門雇用者数変化	4月	190K	211K	79K
5/5	失業率	4月	4.6%	4.4%	4.5%
5/5	平均時給(前月比)	4月	0.3%	0.3%	0.1%
5/12	消費者物価指数(前年比)	4月	2.3%	2.2%	2.4%
5/12	小売売上高(前月比)	4月	0.6%	0.4%	0.1%
5/26	耐久財受注(前月比)	4月	-1.5%	-0.7%	2.3%
5/26	GDP(年率/前期比)	1Q	0.9%	1.2%	0.7%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ドル・ブル (5名、109.00～115.00、中心109.00～115.00)

加藤	110.00 ～ 115.00	リスクオフの際の円高の動きが鈍くなってきており、ドルを買いそびれてきた向きは110円を目処にドル買い意欲が旺盛であろうと予想する。6月米利上げの直後に「sell the fact」的にドル売りが入る可能性もあるが、金利差が開くという事実は侮れない。
高田	109.00 ～ 114.00	今後の利上げ材料となる米経済指標や要人発言を背景にドル/円がサポートされる展開を予想する。一部弱気な発言も見られたがFRB高官は総じてタカ派であり、雇用関連で良好な経済指標が確認されればドルを下支えするであろう。
佐藤	109.00 ～ 115.00	トランプ大統領のロシアゲート疑惑に加え、税制改革期待の剥落等、ドルを取り巻く環境は依然厳しいが、市場には概ね織り込み済みと考える。6月FOMCの声明文や記者会見で9月利上げの蓋然性が高まれば、ドル/円は再度上値トライの展開に転じると予想する。
下山	109.00 ～ 114.00	米景気のドライバーである個人消費支出等に見る中長期的な米国のファンダメンタルズは強そう。欧米の政治リスクや地政学的リスクは確かに存在するが決定打も乏しく、どこまで材料視されるかは疑問。VIX指数等から見るリスクセンチメントも不芳とは言えずドル円は底堅く徐々に上昇する展開を予想。
鶴田	109.00 ～ 115.00	引き続きロシアゲート問題を巡るトランプ政権の先行き不透明感は意識されるものの、同氏の弾劾を決定付ける材料が出てくるとは考えづらい。足元でリスクセンチメントが大きく悪化している印象もなく、6月利上げを無難に通過する中でドル/円は底堅い展開を予想する。

■ ドル・ベア (7名、107.00～114.00、中心108.00～113.00)

田内	109.00 ～ 113.00	年内2度目の利上げはほぼ織り込み済み。利上げは将来の危機対応策として糊代を残しておくためとの見方も相まって相場への影響は限定的とみる。『ロシアゲート』疑惑混迷により、「戦うべき敵を外に作る」トランプ米大統領の行動にも警戒が必要であり、ドルの上値は重いと考える。
山下	107.00 ～ 113.00	情報漏えい問題でトランプ大統領が弾劾に至る可能性は低いものの、求心力の低下は避けられず、トランプ政策の議会通過は困難を伴うであろう。力強かった米経済指標にも陰りが見られ、利上げをしたところでドル買いトレンドにはなりづらいと考える。
矢野	108.00 ～ 114.00	6月米利上げに関しては既に織り込み済み。利上げ後はこれまでの利上げ時と同様に時間の経過と共に米金利低下、ドル売り地合いにより上値は押えられると見ている。トランプの政治運営含め不透明要因が多い中、上値の重い地合いが継続すると予想。
岡本	107.00 ～ 113.00	年2回の利上げ及びB/S縮小計画の年内決定も予想されている中、利上げ決定後は利益確定の売りに押され上値は重くなろう。強弱入り混じる米経済への不安感やロシアゲート事件への対応含めたトランプ政権への不透明感が残存しており、積極的に上値を追う展開は想像し難い。
西谷	107.00 ～ 113.00	FRBの利上げがすでに織り込まれてしまっている以上、今月のFOMCで公表されるドット・チャートでよほど強気な見通しが示されない限り、積極的なドル買いは期待できない。ロシアゲート問題等、トランプ政権が抱えるリスクも燦っており、下方向の展開を基本線に臨みたい。
森谷	108.00 ～ 114.00	6月利上げ期待は既に織り込みが進んでおり、利上げ決定後は材料出尽くし感からドル売りの展開を予想。米政治リスクに加えて米経済指標に対する警戒感もやや高まっている印象があり、今月のドル/円は上値の重い推移をメインシナリオとして予想する。
大熊	108.00 ～ 114.00	ロシアゲート疑惑に進展が見られない限りトランプ政権への不安感は払拭されず、ドルの重しとなるだろう。6月の利上げはほぼ確定と思われるが市場では織り込み済みであり、また、最近多く見られるFRB高官のハト派寄りの発言が6月以降の利上げペースが鈍化するとの懸念に繋がりがやすく、上値は限定的だろう。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0800 ~ 1.1300
EUR/JPY 122.50 ~ 126.50

国際為替部 為替営業第二チーム 島田 貴章

■ 先月の為替相場

5月上旬のユーロ相場は仏大統領選決選投票を材料に上に往って来いの展開。月初1日、対ドル1.09ちょうど近辺にてオープン。3日、FOMCでは事前予想通り現状の金融政策が維持されるも、タカ派寄りの声明文を受けユーロ/ドルは1.08台後半まで下落。翌4日、仏大統領選世論調査におけるマクロン候補優勢との調査結果が報じられる中でユーロ/ドルは1.09台後半まで上昇。翌週初8日、週末に実施された仏大統領選決選投票におけるマクロン候補勝利が報じられ、ユーロ/ドルは寄り付き後に1.10台前半まで続伸。しかしながら、利益確定売り優勢の展開に1.09台前半まで水準を戻した。その後も軟調地合は続き、10日には1.08台半ばまで下落。なお、ドラギ ECB総裁がユーロ圏の景気改善に言及したものの、同時に金融緩和継続も示唆したため、為替相場への影響は限定的となった。

5月中旬のユーロ相場は所謂「ロシアゲート疑惑」の台頭により上昇。11日、英国中央銀行のカーニー総裁による英家計消費低迷懸念に関する発言を受け債券が下落する中、ユーロ/ドルも連れ安となり月安値1.0839をつけた。12日、米経済指標の冴えない結果に加え、来年初からECBがテーパリングを開始するとの観測報道を受けユーロ/ドルは反転、1.09台前半まで上昇。翌週15日、独地方選挙における与党キリスト教民主同盟の勝利を材料に1.09台後半まで上昇、翌16日には1.10台をつけた。17日、トランプ米大統領による情報漏洩疑惑が強まりドル安が進行する中で、ユーロ/ドルは1.11台後半まで上昇。18日には米経済指標の良好な結果を受け一時1.10台後半まで水準を戻したが、翌19日には再度米大統領問題が意識される中でFRB高官によるハト派的発言も伝わりユーロ/ドルは1.12台をつけた。

5月下旬のユーロ相場は高値圏にて推移。週初22日、独メルケル首相による「ユーロ相場は弱すぎる」との発言や次期ECB総裁へバイトマン独連銀総裁を推薦との報道を受け1.12台半ばまで上昇。翌23日には独シヨブレ財務相による「ユーロは独にとって弱すぎる」との発言も加わり、月高値1.1268つけた。しかし、クレーECB理事による「マイナス金利政策を変更する必要はない」との発言が報じられると1.11台後半まで下落。以降は1.12付近でのレンジ推移が続いたが、伊総選挙の今秋への前倒し観測や英総選挙に向けた世論調査において与野党支持率が拮抗しつつあるとの調査結果が報じられた事を受け、30日には1.11台前半まで下落。その後、6月理事会の声明文におけるリスク評価を上方修正する準備があるとのECB当局者発言を背景に1.12台を再度つけ、1.11台後半水準にて取引を終えた。

■ 今月の見通し

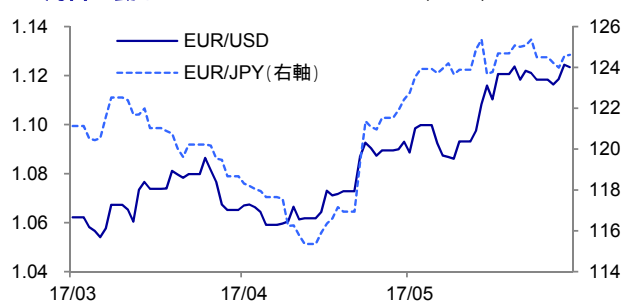
今月のユーロ相場はECBによる現状の金融政策維持並びに欧州圏政治リスクの高まりを背景に上値重い推移を予想する。

前者金融政策についてであるが、当然にして8日開催のECB理事会の動向が注目される。ECB当局者発言にも見られたようにユーロ圏の景気改善を背景としたフォワードガイダンス変更などのECBタカ派路線への傾倒観測が高まりつつあるが、今回合会においては政策変更並びに総裁などによるタカ派スタンス示唆は見送られると予想する。インフレ率の持続的な目標達成に疑義が残存している事に加え、欧州各国での国政選挙を控える中で政策の自由度を限定する行動を取るとは考え難い。仮に観測報道通り来年初からのテーパリングを実行する場合においても、市場へのアナウンスは次回理事会以降で十分に間に合うと考え得るだろう。フォワードガイダンスなどの政策維持は総裁発言でも明確に示されている通りであるが、投機勢によるユーロロングポジションが優勢となっていることに鑑みれば、現状維持を決定したECB理事会後のユーロ売り戻しには注意が必要となろう。

次に後者欧州圏政治リスクについてであるが、6月には英総選挙(8日)並びに仏国民議会(下院)選挙(11日:一次投票/18日:決選投票)が予定されている。加えて、足許では伊解散総選挙の前倒し実施観測が俄かに台頭している。上述の内、仏選挙についてはマクロン大統領率いる新政党「共和国前進」が過半数議席を獲得する見込みであり、大きなリスクとなる可能性は低い。一方で英総選挙であるが、先月発生した自爆テロ事件を契機に与党保守党の支持率が低下、先行きが不透明になりつつある。本選挙はEU離脱交渉を円滑に進める為に強固な政権基盤を確立することを企図した前倒し選挙であったが、当初想定した与党圧勝は困難な情勢である。3月理事会議事要旨にて指摘された通り、ECBは英EU離脱に伴う影響を懸念視しており、野党躍進により交渉停滞懸念が高まればECBハト派化観測の浮上を通じてユーロ相場の軟化へ波及する可能性が考えられる。また、伊解散総選挙は選挙法改正に関する与野党合意が近づいたとの報道から、前倒し観測が高まっている情勢にある。解散権を有するマッタレラ大統領は総選挙前倒しに後ろ向きであるようだが、野党だけでなく与党党首レンツィ前首相も前倒し選挙の必要性を主張しており、前倒し実施の可能性は相応に高いと言える。総選挙においてはポピュリズム政党「五つ星運動」の躍進が警戒される為、前倒し実施の確度が高まるに連れユーロ相場は軟化し易くなる事が予想される。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/3	ユーロ圏GDP (季調済/前期比)	1Q	0.50%	0.50%	0.50%
5/3	ユーロ圏GDP (季調済/前年比)	1Q	1.70%	1.70%	1.80%
5/8	フランス大統領決選投票	-	-	-	-
5/16	独ZEW景況指数 (現状)	5月	82.0	83.9	80.1
5/16	独ZEW景況指数 (期待)	5月	22.0	20.6	19.5
5/17	ユーロ圏消費者物価指数 (前月比)	4月	0.4%	0.4%	0.8%
5/17	ユーロ圏消費者物価指数 (前年比)	4月	1.9%	1.9%	1.5%
5/23	独IFO企業景況感指数	5月	113.1	114.6	113.0
5/23	独IFO期待指数	5月	105.4	106.5	105.2
5/23	独IFO現況指数	5月	121.0	123.2	121.4

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (6名、1.1000～1.1500、中心1.1000～1.1400)

田内	1.1000 ～ 1.1400	独首相・財務相によるユーロ高容認発言やECB理事会でのフォワードガイダンス文言変更観測等から下値固めの展開を見込む。然し乍、ギリシャ追加支援案の合意が先送りされていることや仏・伊での選挙に対する警戒感から積極的に上値を追う展開には至らないとみる。
矢野	1.1000 ～ 1.1400	仏大統領選挙を通過し、一連の政治イベントを消化したことからユーロ高が進んだ。これからはファンダメンタルズの動向に軸足が置かれ、景気指標の改善が確認されれば徐々に下値を切り上げる展開となろう。米トランプ政権に対する不透明感も相場のサポート材料となろう。
下山	1.1000 ～ 1.1500	ECBの金融政策は時期こそ不透明なもの、次の一手は金融引き締めだろう。また、金融政策が不透明な中で投機筋が動きづらいたとなれば、世界最大の経常黒字によるユーロ買いのフローが顕在化してくるとも考えられる。基本的には上目線で臨みたい。
森谷	1.1000 ～ 1.1400	ドラギECB総裁はハト派姿勢を崩していないものの、市場においては依然として緩和縮小に対する期待は根強い。ギリシャ債務問題等の不安材料はあるものの、仏大統領選挙を無難に通過し政治不安が和らいている状況下、底堅い推移となると予想する。
鶴田	1.1000 ～ 1.1500	仏大統領選を巡る欧州政治不安が後退する中、IMMの通貨ポジションも約3年ぶりにユーロ買い越しとなっており、本格的なユーロロングの動きも考え得るところ。英総選挙を背景とするポンド相場に連られる展開には注意するも、基本的にユーロ相場は底堅い推移を予想する。
大熊	1.1000 ～ 1.1400	ECBによる金融緩和縮小への期待感や好調な欧州景気を背景にユーロは底堅く推移すると予想する。仏の下院選挙は無難に通過すると思われ、また、トランプ大統領のロシアゲート疑惑の発覚により政治不安が欧州から米国にシフトしていることもユーロにはプラス要因となるだろう。

■ ユーロ・ベア (6名、1.0700～1.1300、中心1.0800～1.1300)

加藤	1.0800 ～ 1.1300	足許でギリシャ問題が再浮上、イタリア総選挙も予想より早い時期に実施される可能性が高く、再度ユーロ圏の日陰の部分に注目が集まりユーロの頭が徐々に重くなっていく展開を予想する
山下	1.0800 ～ 1.1200	ギリシャ債務問題で、ドイツなどの一部の国はIMFの支援参加なくしては追加融資に応じないとしている一方で、IMFはギリシャの債務削減を支援参加の条件にしており、混乱が予想される。英総選挙も控えていることもあり、ユーロの上値は限定的と考える。
高田	1.0800 ～ 1.1300	ギリシャの国債償還リスクが熾り始め、またFRBの利上げ期待が高まる状況下、ドルの買戻しが予想されユーロは上値の重い展開となろう。ただしECBの緩和解除観測や回復基調にある欧州経済を勘案すれば、ユーロが下落したところでは相応の買いも予想され下値は限定的であろう。
佐藤	1.0700 ～ 1.1300	足許の良好なユーロ圏経済指標を背景にECBによる金融緩和縮小への思惑が高まっているが、インフレリスクを警戒するレベルには至っていない。市場が先んじて織り込んできたテーバリング期待は剥落する可能性が高いと考えており、ユーロは徐々に下値を探る展開となりそう。
岡本	1.0800 ～ 1.1300	近時のイタリア総選挙の前倒しやギリシャ国債償還問題も含めると、従来の欧州政治リスクは一層不透明感が増している状況。ECBのテーバリングへの期待感が先行してユーロが買われてきたものの、1.12近辺での上値の重さも目立っており、徐々に下落していく展開を予想する。
西谷	1.0800 ～ 1.1300	今月のECB理事会でタカ派寄りの内容が示されるとの期待は根強いものの、ドラギECB総裁は依然としてハト派姿勢を崩しておらず、失望感が広がるリスクの方を警戒したい。英総選挙、ギリシャ債務問題、伊総選挙等、欧州発のリスク要因も目立ってきており、下方向の展開を基本線に臨みたい。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2500 ~ 1.3300
GBP/JPY 136.00 ~ 148.00

欧州資金部 笥 純希

■ 先月の為替相場

5月のポンドドルは月前半に上昇した後、戻す展開。目先最も注目されているイベントは翌月8日に控える英国総選挙であるが、4日に実施された地方選は総選挙の前哨戦とされており、結果はメイ首相率いる与党・保守党の圧勝となった。世論調査(ユーロガブ)による保守党の支持率は4月後半の44%から一時は48%に上昇、一方最大野党の労働党は31%と20%台から盛り返すものの差は大きく、保守党の圧勝=安定政権樹立の期待感が広がり、月前半はポンドの上昇基調となった。

11日の英中銀金融政策委員会では、メンバーであるソーンダーズ委員が4月後半に早期の利上げ実施をほのめかす発言をしていたことから、フォーブス委員に加え利上げに賛成するのではと一部で期待されていたが、結局は7対1(フォーブス委員は利上げを支持)で金利据え置きを決定、ポンド高も一旦は一段落したが、16日の4月消費者物価指数(+2.7%、予想:+2.6%)、17日の3月失業率(4.6%、予想:4.7%、ILO基準)、18日の4月小売売上高(+4.0%、予想:+2.1%)と主要指標が軒並み上振れ、季節要因はあったものの英経済の予想以上の堅調さが示されたことで、18日にはポンドドルで昨年9月以来の1.300超えを記録するなど、堅調な展開。

ただし、5月後半に総選挙に向け各党の選挙公約が発表されると雰囲気は変化。保守党はEU単一市場からの撤退と数値目標を含む移民制限(年間純増数:10万人未満、現状:約30万人)などの強硬離脱姿勢を示した。一方労働党は移民制限に数値目標を設けないなど残留派に配慮する融和姿勢を打ち出したことで、支持率の差がじりじりと縮小。26日に発表された世論調査で、保守党43%に対し労働党38%と5ポイント差まで縮小していると報じられるとポンドは1.27台まで下落した。

対円では、10日に昨年6月のEU離脱発表以降の最高値を更新し147円台後半を記録するも、その後は北朝鮮のミサイル発射による地政学リスクのくすぶりやトランプ米大統領の機密情報漏洩を巡る報道もありリスク回避的に円が強含み、月初の水準である144円を超え下落に転じた。

■ 今月の見通し

序盤は、8日の英国総選挙が大詰めを迎える。保守党の選挙公約は移民制限に数値目標を掲げるなど事前に予想されていた以上の強硬姿勢を示したことで、それまでの圧勝ムードが一変、世論調査で労働党との支持率の差は数%まで縮小している。メイ首相は高齢者福祉などで公約を一部軌道修正、焦りがみられ始めた最中マンチェスターで自爆テロ事件が発生、一時選挙運動は中断されムードが変わりつつある。

ただし依然としてメインシナリオは保守党政権の継続である。保守党が現有議席を上回れば、メイ首相の今後2年のEU離脱に向けた交渉の裁量が増すという観点で英国にとってはポジティブである。今後のEU側との交渉を見据え、保守党内からの将来の造反余地を確保できるか、勝ち方が重要と言えよう。前半は総選挙を睨み神経質な展開を想定する。

5月の英中銀金融政策委員会では、一部では利上げ支持が5対3になるかもしれないとの意見もあったものの、結局はフォーブス委員のみが利上げを支持、そのフォーブス委員も6月末には退任が予定されており、当面は金融政策が材料とはなりにくい。

一方、3月末のEU離脱正式通知後の経済指標は、季節要因もあったとは言え概ね堅調な内容が続いている。総選挙後の政権が安定し国内経済も底堅さが確認されると、楽観的な見方が広がればポンド高進行、対ドルで節目の水準と見られている1.300超えに向け進む可能性も相応にあるだろう。EU離脱交渉は6月後半にも開始されるとみられるが、すぐに何かが決定される可能性は極めて低く、英国景気への悪影響が本格化するのもまだ先の話である。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』
英国には日本人の考えるいわゆるコンビニはありません。ただし、Tesco express、Sainsbury's Local、M&S SimplyFoodなど、大手スーパーの小型店舗は深夜まで営業しているところもあり、コンビニに代わるお店として重宝しています。

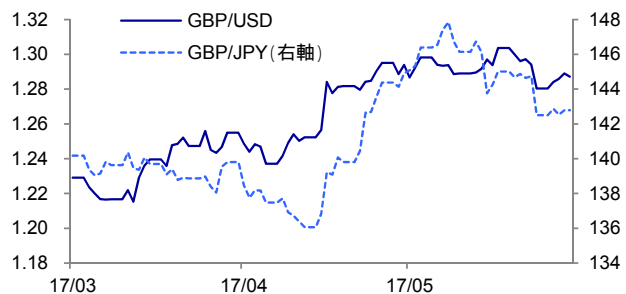
これらのお店では、飲み物、サラダやサンドイッチ、新聞や雑誌のほか、野菜や果物、パンなどがパッキングされず置いてあり、やっぱりスーパーが運営しているんだなという感じがします。あと、レジはカードオンリーのセルフ式が中心です。

加えてコンビニではないですが、ロンドンのオフィスには基本食堂がなく、多くのビジネスマンがデスクランチをするため、スターバックスのようなテイクアウトできるお店が至る所にあります。では、こういったお店でこ売られている商品の個人的な感想を述べます。

- これはよい！
◎スモークサーモン
→スコットランドサーモンは間違いなく美味しい
◎ツナサンド
→日本ほど油っぽくなく、むしろ魚感が強い
◎ポテトチップス
→英国のジャガイモ自体が美味しく、みんな大好き
- 買って後悔！
▲タマゴサンド
→英国の味付け(薄味、低刺激)だと、最も厳しい
▲ソーセージパイ
→中身は味のしない魚肉ソーセージ…
▲コーヒー
→全般的に味が薄い…、紅茶は美味しいので水との相性もありそう

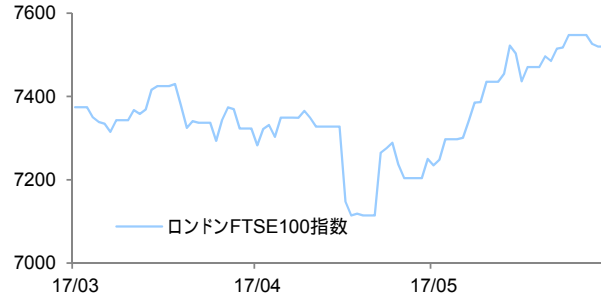
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/2	製造業PMI	4月	54.0	57.3	54.2
5/3	建設業PMI	4月	52.0	53.1	52.2
5/4	サービス業PMI	4月	54.5	55.8	55.0
5/11	鉱工業生産(前年比)	3月	2.0%	1.4%	2.5%
5/11	製造業生産(前年比)	3月	3.0%	2.4%	3.0%
5/16	消費者物価指数(前年比)	4月	2.6%	230.0%	2.3%
5/16	消費者物価指数(コア・前年比)	4月	2.3%	2.4%	1.8%
5/17	ILO失業率	3月	4.7%	4.6%	4.7%
5/18	小売売上高(含自動車前年比)	4月	2.1%	4.0%	2.0%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7330 ~ 0.7560
AUD/JPY 81.50 ~ 85.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 山口 美紀

■ 先月の為替相場

5月の豪ドルは4か月ぶり安値0.7329を付けた。

1日、豪ドルは0.74後半でオープン。翌日の豪準備銀行(RBA)理事会では、予想通り政策金利が1.50%に据え置かれたが、豪ドルは月初高値0.7556を付けた。その後、3日の良好な米経済指標や、4日早朝に公表された米連邦公開市場委員会(FOMC)声明文のタカ派(金融引締め積極派)な内容を受けて、ドル買い進行。豪ドルは一気に0.74台に下落した。4日、原油価格を中心に商品価格の大幅下落を受けて、豪ドルは0.73後半を付けた。翌日、RBA四半期金融政策報告ではサプライズ無く、豪ドルは0.74を挟んで推移。

翌週9日、豪州連邦政府のモリソン財務相は2017/18年新年度予算案を発表。財政黒字化は2020/21年度と前回12月に発表されたものと同内容になったものの、豪ドルは軟調に推移し、一時月初安値となる0.7329を付けた。しかし、豪ドル下落の勢いは続かず、次第に豪ドルは0.73後半に切り替えた。12日、米4月小売売上高が前月比+0.4%増加と予想同+0.6%に届かず、ドル売り進行。豪ドルは約1週間ぶりに0.74台を回復した。その後、RBA議事録、豪州労働市場の経済指標が発表されるも、豪ドルへの影響は限定的となり、豪ドルは0.74台での推移が続いた。

23日、トランプ米政権は初の予算教書を議会に提出。大型減税で経済成長率を3%に高め、財政収支を10年で黒字転換させる案だが、具体性は欠いたままとなり、ドルが売られ、豪ドルは約3週間ぶりに0.75台を回復。しかし、0.75キープは難しく、豪ドルは0.74台を中心での推移が続いた。

■ 今月の見通し

「FOMCでの利上げ有無、FOMCメンバー政策金利見通しに注目」

5月FOMC議事要旨では、追加利上げや再投資政策の見直しの時期が近付いていることが示された。6月の利上げは確実視される一方で、米国での政治不安が残存する中、先行きの利上げペースには引き続き慎重に見ている。先月、トランプ大統領のコミー前FBI長官に対する妨害報道から「ロシア疑惑」が強まり、大統領弾劾への懸念が浮上した。また、4月26日にトランプ政権が示した税制改革骨子も、ほぼ選挙公約を踏襲したものであり、今後10年で約5.5兆ドルの財政コストをどのように補うかといった議論は宙に浮いた状況である。5月23日の予算教書では低所得者向け給付を中心とした歳出削減や各種の施策を受けた成長促進による税収増を織り込むことによって財政赤字の拡大は防げると主張しているが、実現性は乏しいと思われる。引き続き、トランプ大統領の発言、言動に留意したい。

一方、豪州では5月9日に2017/18年新年度予算案が発表された。昨年12月に発表された予算案同様、2020/21年度には財政黒字化を達成する見込みとなった。また、政府の予測では、GDP:17/18年度は+2.75%、18/19~20/21年度は+3%継続、失業率:17/18年度は5.75%、その後5.25%に減少、賃金上昇率:17/18年度~20/21年度に+2.5%から+3.75%に上昇するとなった。予算案を受けて、一部懸念されていた豪州格下げは見送られ、大手格付け会社は豪州の「AAA」格付けを維持した。しかし、大手格付け会社のムーディーズは、豪州の最大輸出先である中国の格付けを「Aa3」から「A1」に1段階引き下げた。潜在成長率の低下に伴い、債務負担が重くなることが格下げの理由としている。中国は経済成長率が以前に比べ低下、更に債務残高は経済成長より早いペースで増加しており、昨年後半からの景気の持ち直しは今後も継続するかが注目される。

以上のことから、まずは6月FOMCで利上げより、ドルは買われやすいだろう(豪ドルは売られやすいだろう)。しかし、米国は政治不安、豪州は貿易不安を抱えており、どちらの通貨も積極的に買いづらい状況と考える。豪ドルは前月のレンジ(0.73前半~0.75半ば)での推移となろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

東京時代、土日も含めて毎日通っていたコンビニですが、今ではほとんど行かなくなりました。というのも、オーストラリアのコンビニは、スーパーの開店・閉店時間とほぼ同じ時間(もちろん店舗によって異なりますが、自宅近くのコンビニは6:00am~10:00pm、スーパーも同時間)。コンビニは、品数も少なく、値段も高い。強いて言うなら、新聞とタバコは同価格なので、これらを買うときぐらいいしか利用しません。新聞はインターネット及びアプリで閲覧、タバコは吸わないので、ほとんどコンビニを使わなくなりました。日本と違い、魅力的なおにぎりやおでん、そしてお酒もあります。意外によく利用していたコピー機もありません。コンビニに行く回数は圧倒的に少なくなりました。

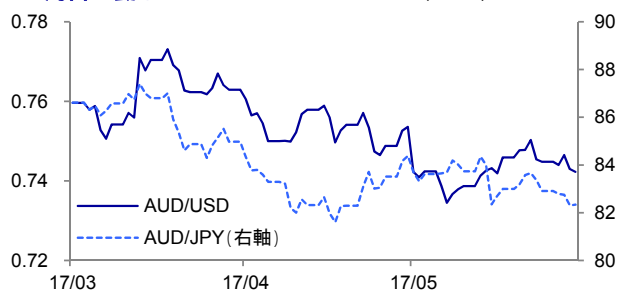
一方で、オーストラリア人(当チームメンバー)から見た日本のコンビニはAmazingらしいです。日本のコンビニに行ったことがある同僚にAmazing要素を聞いてみました。

- ◆飲み物の豊富さ(お酒も購入可能、メロンソーダーが最高だったという声もあり)
- ◆お菓子の豊富さ(新商品、季節限定商品、小分けの多さ)
- ◆高級で美味しいスモールスイーツ(私はスモールだけではなくビッグサイズの俺のシリーズも大好きでした)
- ◆(特別イベントの)くじ引き
- ◆24時間営業
- ◆コンビニの数の多さ(各コンビニの距離の近さ)
- ◆コンビニに加えて自動販売機もあり

オーストラリアでは、名前通りのパブからパブへとPub Crawl(ハシゴ酒)している同僚は、日本ではコンビニPub Crawlをしているようです。みなさんの同僚はいかがですか？

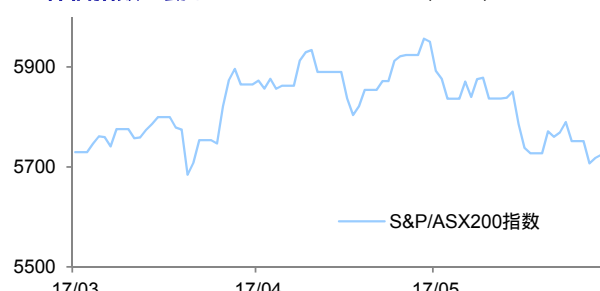
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/2	RBAキャッシュレート		1.5%	1.5%	1.5%
5/4	貿易収支	3月	A\$3250M	A\$3107M	A\$3657M
5/8	建設許可件数[前月比]	3月	▲4.0%	▲13.4%	8.9%
5/9	小売売上高[前月比]	3月	0.3%	▲0.1%	▲0.2%
5/9	連邦予算案発表				
5/15	住宅ローン申請件数(前月比)	3月	0.0%	▲0.5%	▲0.8%
5/16	RBA議事録				
5/18	雇用者数	4月	5.0千人	37.4千人	60.0千人
5/18	失業率	4月	5.9%	5.7%	5.9%
5/30	建設許可件数(前月比)	4月	3.0%	4.4%	▲10.3%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3250 ~ 1.3700
CAD/JPY 80.00 ~ 85.00

GM業務部カナダ室 三木 順一郎
那須 紘子

■ 先月の為替相場

月初1.36台半ばでオープンしたドル/カナダドルは、先月末からの米トランプ政権によるNAFTA離脱議論のセンチメントを引き継ぎ上昇傾向が継続。加えて、先月からの原油の下落傾向もカナダドルに対する下押し圧力に。期近原油先物は第一週目に発表された原油在庫の減少幅が予想よりも小さかったことも背景に、一時昨年11月のOPEC減産合意前の水準である、1バレル45ドルを割り込む水準にまで下落。5/5にはドル/カナダドルは一時、月中高値となる1.3793まで上昇した。

5/5に発表されたカナダ4月雇用統計は、失業率こそ6.5%と予想を下回る良好な結果であったが、雇用者数は予想10千人の増加に対して3.2千人の増加と予想を下回り、増加雇用者の内訳もフルタイム雇用者が31.2千人減少と、総合すると米4月雇用統計対比でもソフトな結果となった。しかしながら、大幅に下落していた原油価格に安値からの買戻しも入ったことから同日に大きく反発したことから、ドル/カナダドルも大幅な下落となり、既往トレンドの転換点となる。

5/11にはMoody'sによるカナダ主要6銀行の格下げが発表されカナダドル売り材料となるものの、月末のOPEC減産会合に向けた期待を受けたショートカバーからの原油高、米コミーFBI長官の解任等トランプ大統領に対する不透明感が強まり、米国とカナダの金利差が縮小に転じてきたことからのドル安がドル/カナダドルの下落トレンドの要因となった。

5/24のカナダ中央銀行政策金利決定会合では、市場予想通り政策金利は0.5%で据え置かれたものの、声明文がファンダメンタルズに対してやや前向きなトーンであったとしてカナダドル高要因となり、ドル/カナダドルにとって一つの節目である1.35を明確に割り込む展開。注目の5/25のOPEC会合では減産措置が6月末から来年3月末までの9か月間延長の決定がなされたが、減産規模の拡大なし、延長期間も概ね折込済みであったとしてドル/カナダドルは月中安値となる1.3388から反発を見せている。

■ 今月の見通し

5月月初は既往レンジであった1.36を明確に上抜けたものの、重要ポイントの一つでもある1.38手前で切り替えし、既往レンジ内に戻ってきた。5月のカナダ金融政策決定会合でカナダ中央銀行は政策金利を現行の0.5%で据え置いた。声明文からは、原油価格下落によるネガティブインパクトはボトムアウト、労働市場は堅調といった総合するとカナダ経済に対して前向きなトーンが見られ、一部では「Current degree of monetary stimulus is appropriate at present」を利上げに向けた地ならしとの見方もあったが、引き続き現行の金融政策を変更する必要には迫られていないと考える。米国の金融政策は現時点では6月FOMCでの追加利上げはほぼ確実ではあるものの、9月や年末の利上げ予想を論じるのはFedバランスシート政策もあり時期尚早。加えてさらなる米金利低下からの相対的なカナダドル高は限定的と見る。

米トランプ政権はここにきて不透明感を強めてきたが、NAFTA離脱議論については現実問題は別にして、再び市場のフォーカスを集める可能性もある一方、CFTCのデータからはスเปック筋のネットポジションは過去数年来最大のショートとなっておりカバーを促しやすい状況でもある。原油価格についてはOPEC会合後、今後の展開について見通し難いがドライビングシーズンを迎え、基本価格下支え方向は続こう。カナダドルにとって双方向の材料から結局はレンジ、予想レベルは前月と変わらない1.325-1.370を予想。

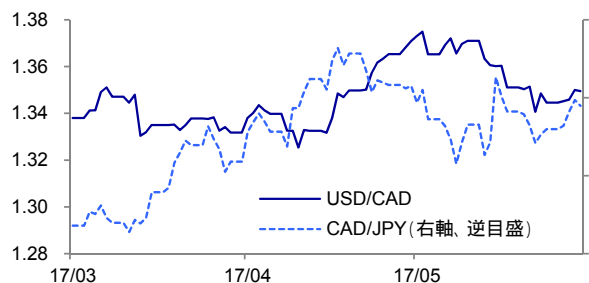
■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

近くて便利なコンビニ、特に用はないけどふらっと入ってしまうコンビニ、気が付けば新作のスイーツをかごに入れてしまうコンビニ、機嫌を損ねた甥っ子もすぐ笑顔になるコンビニ…これは日本のコンビニの話でカナダのコンビニのことではありません。カナダのコンビニは何と云うか…スタバもタリーズもどこも混んで入れないからしょうがないからルノアルに行くか、的な…最終手段と言った方が良いでしょう。特にふらっと入りたくならないし、日本のコンビニみたいに気持ちが高揚することはありません。カナダやアメリカはドラッグストアがかなり進化していて、コンビニに比べ食料や日用品の品揃えも多く、店舗もかなり多いので、皆そちらに行く傾向にあります。カナダのコンビニは大きく分けると大手フランチャイズ/チェーン系と個人経営の2つに分かれます。大手FC/チェーン系には日本でも親しみのあるセブンイレブンやサークルKなどがありますが、私のように日本のコンビニを想像し、淡い期待を持って行ったらもれなくがっかりするのでご注意ください。お惣菜やお弁当はあまり…というか全然充実していません。しかし店内にはセルフ式ホットドッグスタンドがあり、そこでは何十本ものソーセージが一斉にくると回っているという北米らしいスペクタクルな光景が見れます。私はこれを初めて見た時、ナイアガラの滝を見た時より感動してしまいました。カナダでよく見るもう1つのタイプは個人経営のコンビニです。こちらはざっくり2系統あり、「商品に被ったホコリからやる気が全く感じられない無気力コンビニ」と「地域のニーズを理解した商品展開と温かい接客の地域密着型コンビニ」で分かれます。後者の優秀なコンビニはトロント北部のノースヨークや地方に多く点在しています。ちなみに私のお勧めはハーバーフロントのlakeview Convenienceという混沌としたコンビニです。旅行に便利なミニアイロンからアート、トイレトペーパーはバラで1ロールから売っています。

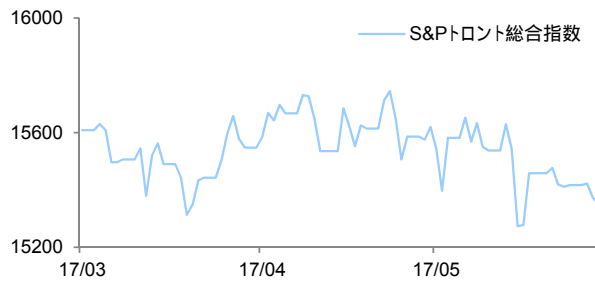
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/5	失業率	4月	6.7%	6.5%	6.7%
5/5	雇用ネット変化率	4月	10.0k	3.2k	19.4k
5/5	IVEY製造業PMI	4月	-	62.4	61.1
5/8	住宅着工件数	4月	215.0k	214.1k	252.3k
5/9	建設許可件数	3月	2.8%	-5.8%	-2.8%
5/19	消費者物価指数(前月比)	4月	0.5%	0.4%	0.2%
5/19	小売売上高(前月比)	4月	0.3%	0.7%	-0.4%
5/24	BOC政策金利	4月	0.5%	0.5%	0.5%
5/31	GDP(前月比)	3月	0.2%	0.5%	0.0%
5/31	GDP(前期比年率)	Q1	4.2%	3.7%	2.7%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1090 ~ 1150
 KRW/JPY 9.52 ~ 10.15
 JPY/KRW 9.85 ~ 10.50

(注)100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 山口智裕

■ 先月の為替相場

ドル/ウォンが反落。韓国大統領選後に下げ幅を拡大した。

連休明け2日のドル/ウォンは1136.0で取引を開始。その後、7日の仏大統領選の決戦投票結果や北朝鮮が核実験の準備しているとの報道を受けて、ドル/ウォンは10日に月高値となる1137.5まで下げ幅を縮小した。

しかし、韓国新大統領への期待感、地政学リスクの後退、低調な米経済指標や原油減産延長の合意期待などを受けて、ドル/ウォンが下げ幅を拡大。17日には月安値となる1114.8(前月末比▲23.1ウォン高)まで下落した。その後、「ロシアゲート」疑惑などを受けて、下げ幅を縮小する場面もみられたものの、FOMC議事要旨で数人のメンバーがインフレの減速について指摘したことなどを受けて、再度上値重く推移し、前月末比▲10.6ウォン高の1119.5で引けた。

9日の韓国第19代大統領選では、事前の世論調査通り、革新派「共に民主党」の文在寅(ムン・ジェイン)氏(64)が約41%の得票率で2位の候補に歴代最多の票差をつけて当選した。

25日のBOK金融通貨委員会では、市場予想通り政策金利が1.25%に据え置かれた。李総裁は会合後の記者会見で、「現在の金利水準は十分に緩和的」との認識を継続し、「韓国経済は4月時点での見通しよりも良好であり、7月に上方修正される可能性が高い」と発言した。

■ 今月の見通し

6月のドル/ウォンは上値の重い展開を予想する。

6月は15日の米FOMCや韓国の補正予算の動向に注目したい。

6月の米利上げは市場では概ね織り込まれているものの、足許インフレを始めとする経済指標が低調となっていることや、トランプ大統領の政策期待が後退している。ドットチャートなどで今後の利上げペースが引き下がる場合、一段とドル安が進む可能性もあり、注意したい。

韓国では、文在寅氏が新規大統領に選出され、公約にあげていた補正予算について6月の臨時国会中の成立を目指すとしている。足許はこの補正予算やスチュワードシップコード導入の推進などによるコリアディスカウント修正期待などから、韓国株が史上最高値を更新し、資金流入が継続している。好調な韓国企業収益もあり、目先はこの傾向が継続すると思われる。

ただし、補正予算については、雇用創出を理由に編成が試みられており、最大野党韓国自由党は国家財政法上、要件を満たさないとして反対していることから注意が必要。また、韓国輸出の伸びを牽引している半導体について、5月末に発表された4月鉱工業生産統計では大幅な生産減が見られ、出荷-在庫バランスも大きく悪化した。足許BOKを含むエコノミスト等は韓国の成長率見通しを上方修正しているものの、この傾向が継続するようであれば、見通しにも再度不透明感が漂うことになることから、注視が必要となる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

韓国でコンビニといえば、概ね「GS25」、「7ELEVEN」、「CU」、「MINISTOP」の4大チェーンが挙げられます。

日本との違いでいうと、よく「1+1」や「2+1」を見かけます。1つ買うともう1つ貰えるだったり、2つ買うともう1つ貰えるというもので、もたが高くと感じるものが多いので、本当にお得かは微妙なところですが、嬉しいサービスです。

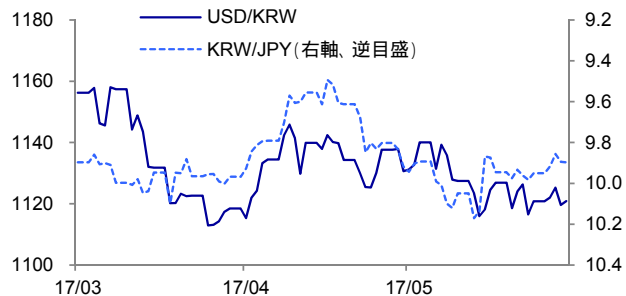
他には、食べるスペースが用意されているコンビニが多く、立ち食いまたは椅子に座ってカップラーメンなどを食べている人をよく見かけます。

一方、致命的なのは、おにぎり、弁当、デザートがおいしくないことでしょうか。日本にいる際は、コンビニ弁当をよく食べていたのですが、こちらでは食べる気になりません。。。韓国のネットなどでも日本のコンビニフードのおいしさに言及されているのをみますが、今後に期待したいところです。

なんだかんだ言いながら、ほぼ毎日コンビニを利用しているので、より便利においしく進化していくことを願っております。

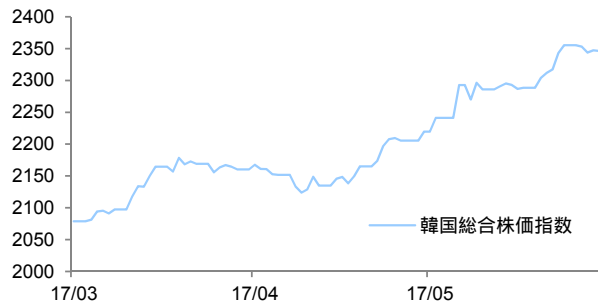
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/1	貿易収支	4月	\$8600m	\$13300m	\$6553m
5/2	消費者物価指数(前年比)	4月	2.1%	1.9%	2.2%
5/2	日経韓国製造業PMI	4月	--	49.4	48.4
5/11	失業率(季調済)	4月	3.6%	4.0%	3.7%
5/21	輸出 20日間 前年比	5月	--	3.4%	28.4%
5/21	輸入 20日間 前年比	5月	--	11.7%	16.4%
5/25	韓国銀行7日間レートの		1.25%	1.25%	1.25%
5/26	消費者信頼感	5月	--	108.0	101.2
5/31	鉱工業生産(季調済/前月比)	4月	0.6%	-2.2%	1.0%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 29.80 ~ 30.70
TWD/JPY 3.55 ~ 3.80

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

5月のドル/台湾ドル相場は、ドル安台湾ドル高。

月初30.190でオープンしたドル/台湾ドルは、株価の堅調な推移を受けて、外国人投資家の資金流入額が膨らみ、台湾ドル買い優勢の展開。5/3には2014年9月以来の安値となる29.940をつける場面もみられた。しかしながら、FOMC声明文で1-3月期の経済成長率の鈍化は一過性のもの、労働市場は引き続き力強さを増しているとの見方が示されると、6月FOMCでの利上げ期待が高まり、ドル高基調に転じ、翌5/4の台湾市場では30.1台を回復。仏大統領選決選投票を週末に控えた5/5もドル高の流れは継続し、ドル/台湾ドルは30.194まで上昇。

5/7に行われた仏大統領選決選投票では、事前の世論調査の結果通り、マクロン候補が極右政党国民戦線のルペン候補に大差をつけての勝利。これを受けて欧州の政治リスクへの懸念が大きく後退。翌5/8は株高となる中、外国人投資家の資金流入から台湾ドル買いが先行するも、その後は米金利上昇を背景にドル/台湾ドルも反発。5/10には5月の高値となる30.290まで上昇した。

月半ばに入ると、弱い結果となった米小売企業決算や、米4月小売売上高、米5月NY連銀製造業景況指数などの米経済指標が市場予想を下回る結果となったことなどを背景に、ドルは軟化。トランプ大統領がフリン前大統領補佐官へのFBIの捜査に対し、打ち切りを要請したとの報道を受けて、米株が大幅に下落する場面では、台湾株も連れ安となり、外国人投資家の資金流出を受け、一時的に台湾ドル安へ振れる場面もみられたが、米金利が低下基調で推移する中、ドル安台湾ドル高の流れは変わらず。

月末にかけても、輸出企業のドル売り台湾ドル買いフローの増加に加え、5月FOMC議事要旨での「追加利上げを行う前に最近の経済活動ペースの鈍化が一過性である」という追加的な証拠を待つのが賢明」との内容がハト派のと捉えられ、ドル/台湾ドルは上値の重い推移が続く展開となった。

■ 今月の見通し

6月のドル/台湾ドル相場は、ドル安台湾ドル高を見込む。

5月に発表された台湾の経済指標をみると、半導体関連製品や大型液晶パネルの需要の伸びを受けて、4月の輸出額が前年同月比9.4%増と7か月連続の増加。台湾財政部は世界的な景気の回復傾向が続いていることに加え、スマートフォンの新製品投入、IoTなど新分野での商機拡大により、5月以降の輸出も好調を維持できるとの見方を示している。一方、輸入についても半導体関連の設備投資向け調達増加を受けて、前年同月比23.5%の大幅な増加となった。これを受け、貿易収支は前年同月比41.9%減の約28億ドルの黒字となったが、黒字額は2015年11月以来の低い水準に留まった。

6月の注目材料は、米国の金融政策ならびに、台湾の株式市場における外国人投資家の動向。6/13-14にかけて開催されるFOMCでは、25bpの利上げが見込まれている。注目されるのは、5月FOMCで「一過性」とされた経済活動ペースの鈍化に対するFOMCメンバーの判断であるが、FRB高官によるハト派的な発言も目立ち始める中、6/2に発表される米5月雇用統計をはじめとする経済指標でも弱い結果が続けば、今後の利上げペース鈍化への懸念も生じかねない。

台湾側の材料としては株式市場における外国人投資家の動向が注目される。足元、ドル/台湾ドルと台湾加権指数は非常に高い連動性を示しており、台湾加権指数の上昇をけん引している外国人投資家の資金流入が続けば、台湾ドル高圧力も継続しやすい。

なお、6月は台湾中銀の金融政策決定会合の開催が予定されている。足元の短期金利市場の動きからは、利上げを織り込む動きは特段見られず、政策金利は1.375%で現状維持となる可能性が高いか。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

コンビニ大国である台湾には、セブンイレブンとファミリーマートを中心に1万店を越えるコンビニが存在しております。コンビニ密度は世界一と言われており、街を歩いていると、あちらこちらにコンビニを見かけます。

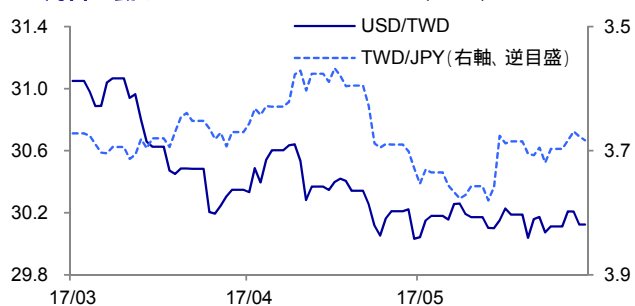
日本同様、基本的には24時間営業で、商品の品揃えも食品、日用品、雑誌など、非常に充実しております。セブンイレブンやファミリーマートでは、少し割高にはなりますが、日本の食品なども購入することが可能です。また、おでんや肉まんなども日本同様、多くの店舗で見られます。

その他のサービスとしては、ATMや、コンサートチケット、高鉄(日本で言う新幹線)などのチケットを購入することが出来る機械もあるほか、イートインスペースもかなり多くの店舗で備えられております。

台湾ならではのものといえば、茶葉蛋と言われる台湾風煮卵です。卵を茶葉や八角などの調味料と煮たもので、茶色がかかった殻付きの卵になります。八角の匂いが店内に充満していることも多く、店内に入るとまず目に入る商品の1つです。1個10台湾ドル程度で販売されており、お手軽に購入できます。

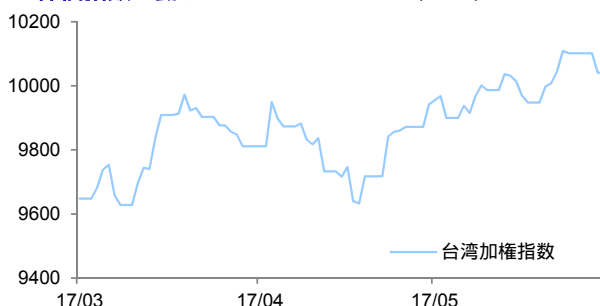
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/5	消費者物価指数(前年比)	4月	0.50%	0.12%	0.18%
5/5	卸売物価指数(前年比)	4月	1.57%	1.12%	1.74%
5/5	外貨準備高	4月	-	438.43B	437.53B
5/8	貿易収支	4月	4.10B	2.78B	3.93B
5/8	輸出(前年比)	4月	10.70%	9.40%	13.20%
5/8	輸入(前年比)	4月	17.50%	23.50%	19.80%
5/22	輸出受注(前年比)	4月	13.00%	7.40%	12.30%
5/22	失業率	4月	3.83%	3.78%	3.84%
5/23	鉱工業生産(前年比)	4月	4.00%	-0.59%	3.22%
5/26	GDP(前年比)改定値	Q1	2.60%	2.60%	2.56%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7700 ~ 7.8000
HKD/JPY 13.90 ~ 14.50

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【5月の香港ドル直物相場】

ドル／香港ドルは香港ドル安の流れが継続。5月央には、一時的に約15か月ぶりとな7.7947水準まで香港ドル安が進行する局面も見られたものの、その後は7.78～7.79水準で推移する展開となった。香港ドル金利とドル金利の金利差が引き続き拡大したことが香港ドル安進行の主因と想定される。6月FOMCでの利上げが相応に織り込まれつつある中で、香港ドル金利は潤沢な流動性状況から米ドルとのペッグ制であるにもかかわらず低位で推移している。斯かる中、ドル／香港ドルフォワード1年物は▲510ポイントと約9年ぶりの低水準で推移した。一方で、配当金支払いに係る香港ドル買いニーズや香港株式市場が堅調に推移したことで、ドル買い／香港ドル売りポジションの巻き戻しも散見され、過度な香港ドル安に歯止めをかけた格好となった。

【5月の香港ドル金利市場】

香港ドル金利は流動性が相対的に潤沢であることから低下した。インターバンク市場の流動性を図る指標である香港通貨管理局(HKMA)の当座預金残高は、8か月連続で2,600億香港ドル程度と高水準になった。香港のHIBOR3か月物は0.78%付近と前月末から0.09%程度低下した一方で、LIBOR3か月物は1.19%付近と前月末から0.02%程度上昇し、香港ドル金利とドル金利の金利差は約0.41%程度まで拡大した。斯かる中、香港ドルスワップ金利とドルスワップ金利の金利差についても、前月末から拡大した。ドル／香港ドルの通貨ベースは、海外勢による債券発行に係るヘッジフローが一服したこと、相対的に安定した推移となった。

【5月の香港株式市場】

ハンセン指数は、中国株式市場がレバレッジ解消に係る懸念から軟調に推移しているにもかかわらず、テクノロジー関連株が上昇を牽引し、25,487水準と22か月ぶりの高値を更新する等、堅調に推移した。香港株式市場が堅調に推移したことで、香港ドル売りポジションの巻き戻しを誘発し、結果香港ドル直物相場の一段の下落を抑制する格好となった。

■ 今月の見通し

【6月の香港ドル直物相場】

香港ドル金利とドル金利の金利差は引き続き拡大しており、香港ドル安の流れは残存するものの、配当金支払いに係る香港ドル買いニーズも相俟って、ドル／香港ドルの取引レンジは7.77から7.80を想定する。加えて、ドル／香港ドルフォワードは低水準での推移が継続しており、一部企業から先々のドル調達を確保する動きも散見されている模様。斯かる中、ドル／香港ドルフォワードのマイナス幅は今後縮小していくだろう。

【6月の香港ドル金利市場】

6月FOMCでの利上げが相応に織り込まれつつある中で、香港ドル金利とドル金利の金利差は拡大傾向にある一方、足許香港ドル市場の流動性は潤沢な状況が継続しており、香港ドル短期金利は低位安定を見込む。市場参加者は香港ドル金利の上昇ペースに楽観的な一方で、香港金融管理局(HKMA)は足許の流動性状況をコントロールする目的から、市場から資金を吸収する役割がある為替基金短期債券の発行による香港ドル金利引き上げを徐々に実施する可能性がある想定する。香港からの急激な資金流出は香港不動産市場や安定した金融市場に混乱を招く恐れがあり、7.85水準等の過度な香港ドル安が進行するより前に、先んじて相場を安定させる措置を講じるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

香港はとても小さい島に数多くのコンビニが密集しています。地下鉄の駅に併設されている小さいものから、街中や建物の中にあるもの等、店舗の大きさも様々です。

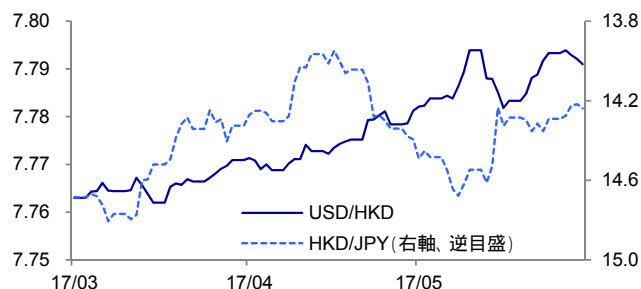
然しながら、いくつかの店舗によっては、店舗が小さい故に便利さ(コンビニエンス)に欠ける店舗もしばしば散見されます。

具体的には、日本のコンビニでは購入することが出来る卵や調理用油等の食料品や、シャンプーやトイレットペーパー等の日用品が、香港のコンビニでは手に入らないことが多いです。

夜遅くに、上記のものが必要になった場合は、コンビニではなく、24時間営業のスーパーに駆け込むのが香港スタイルのようです。

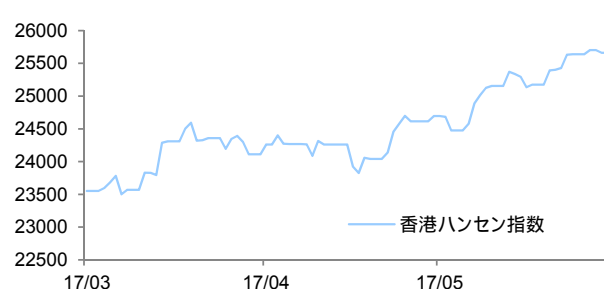
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/5	日経香港PMI	4月	-	51.1	49.9
5/5	小売売上高(価格、前年比)	3月	-0.9%	3.00%	-5.70%
5/5	小売売上高(数量、前年比)	3月	-1.0%	2.70%	-6.10%
5/8	外貨準備高	4月	-	\$400b	\$395.5b
5/18	総合利率	4月	-	0.32%	0.32%
5/19	失業率(季調済)	4月	3.20%	3.20%	3.20%
5/23	CPIコンボジット(前年比)	4月	1.50%	2.00%	0.50%
5/25	輸出(前年比)	4月	12.50%	7.10%	16.90%
5/25	輸入(前年比)	4月	13.50%	7.30%	13.00%
5/25	貿易収支(HKD)	4月	-39.2b	-34.1b	-42.3b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.7500	~	7.0500
	CNY/JPY	15.18	~	16.89
	100JPY/CNY	5.9300	~	6.5200

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 馬場 一樹

■ 先月の為替相場

【為替相場】

5月のドル/人民元相場も引き続き動意に乏しく、総じて6.90近辺でのレンジ相場を形成。月初のドル/人民元実勢相場は6.90手前でオープン。3日のFOMCでは楽観的な米景気見通しが示されたことで6月の利上げ期待が高まり、ドルが底堅く推移。5日に発表された4月米雇用統計も良好な結果となり、7日の仏大統領選も予想通りマクロン氏が当選とリスクイベントを消化したことからドル買いが進行。ドル/人民元もドル高を背景に一時6.90台後半まで上昇し、その後6.90台前半で推移した。4月の中国PPIは伸び率が鈍化したものの、中国貿易収支が底堅い内容を示したことや中国CPIでは回復を見せる等まちまちな内容となり、相場への影響は限定的だった。15日には経済圏構想「一帯一路」の初の国際会議が閉幕。中国とアジア、欧州、アフリカを含む経済圏沿線への投資と貿易活性化に向けた行動計画が示された。月後半にかけてはトランプ大統領がプリン前大統領補佐官に対する捜査について司法妨害を行った可能性を巡り、政治的不透明感が高まったことを背景にドル安が進行。ドル人民元も全般的なドル売りや、PBOCが継続的に人民元高方向へ仲値を設定したこと等を背景に人民元高が進み、ドル/人民元は6.88台半ばまで下落した。24日に米ムーディーズ社による中国国債格下げの報道があり、格下げによる人民元の先安観を懸念した、もしくは人民元の強さを示したい中国当局と思しき大口の人民元買いの動きを背景に一時6.82割れまで下落した。

【金利相場】

納税に伴う資金需要の高まりといった季節要因や、当局による金融引き締めスタンスを背景に金利上昇圧力が高まり易い地合いが継続。月前半はリバースレポが実施されるも、3日に満期到来となった中期貸出ファシリティ(MLF)がロールされずネット資金吸収となる中、中資系大手行中心に資金調達ニーズも高まり、短期ゾーン中心に金利上昇。月末越えを意識した1ヶ月物の資金調達ニーズも高まった。その後一部で資金放出が見られたことや、12日にMLFによる資金供給が実施されたことを受けて短期ゾーンの金利は一旦低下。一方、月末越えのターム物金利については引き続き上昇となった。月後半にかけては資金調達ニーズが相応に見られるも、MLF実施による需給緩和により一旦は相場が落ち着き、カーブ全般的に横ばいで推移。ムーディーズによる格下げの影響は、市場参加者が国内投資家で占められていることもあり、限定的だった。

■ 今月の見通し

【為替相場】

6月のドル/人民元相場も、引き続き落ち着いた値動きを想定。月前半は米国及び中国での経済指標次第で上下する展開もあり得るが、当局は通貨安定を目指すべく金融引き締めや規制強化を継続しており、過度な動きは想定せず。足許米国ではトランプ大統領における政治的不透明感が高まっており、さらなる進展があれば全般的なドル売りからドル安人民元高に進む可能性もある。当局による介入が継続するかも注視。14日のFOMCでは政策金利の引き上げが実施される見通しだが、6月の利上げについては市場では既に織り込み済みであり、利上げに対するインパクトは限定的か。しかし一方で、今後の利上げについての言及やバランスシート縮小の議論が加速する場合はドル高への圧力が高まり易くなるため、一時的なドル高人民元安にも警戒。中期的には人民元の先安観や資本流出圧力の高まり等からドル高人民元安が進み易い地合いが継続するものと想定。

【金利市場】

月初は月末を越えて資金需要が一旦は落ち着き、金利は短期ゾーン中心に若干低下しやすい展開か。しかし、当局が金融引き締めスタンスを維持する中、流動性がタイトな状況から月後半にかけては全般的に金利上昇圧力がかなりやすい状況が継続するものと想定。月末越えのターム物も引き続き資金需要が高まり易いか。流動性がタイトな状況は続くと思われるものの、PBOCは状況に応じてリバースレポの金額を増減させるなどしてオペレーションを適宜調整しているため、大幅な金利上昇には繋がらないだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

中国ではコンビニエンスストアのことを「便利店」と言い、都心では街中の至るところに便利店があります。上海等都心のオフィスで働く人たちは日本同様、コンビニエンスストアを買いに行くなど日常生活に必須となっております。勿論中国系のコンビニも多くありますが、ここ上海では日系のコンビニもどこに行っても見かけるほど沢山あると思います。

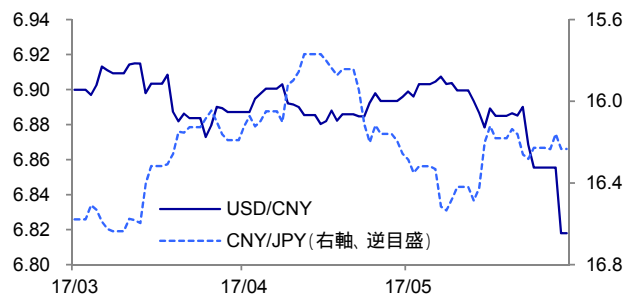
品揃えも基本的には日本と同様で、肉まんやおでんは設置してありますし、朝の出勤時間に合わせてサンドイッチやおにぎり等が店頭で沢山敷き詰められています。

勿論、味や作り方は若干違う部分もありますし、比較的日本と比べて油っこいものも多い気がしますが、温めて食べるとこれまた非常に美味しいです。日本の製品も沢山販売されていますし、全体的にはそこまで違いを感じません。

ひとつ違うのは、決済の方法でしょうか。日本では基本的にはお金か電子マネーでの支払いが多いかと思いますが、ここ中国ではアプリ(支付宝、微信等)で支払うのが一般的。コンビニだけでなくタクシーやレストラン、ショップ等あらゆるお店は基本的にアプリで支払えますので、決済は一瞬で終わります。ちなみに、他人との資金の受け渡しもアプリ内で簡単に Rowe れますので、会計を仲間内でする際にもわざわざ振込や資金の受け渡しを行う必要もありません。とにかく電子決済がとて進んでおり、ほとんどの人が当たり前のように使いこなしています。支払いに時間がかからないというのは、コンビニでの待ち時間削減に繋がっているなと感じます。もしこちらにお越しの際は、レジでおつりや小銭の出し入れ等でもたつかないように注意しましょう。(経験談)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/8	貿易収支(RMB建)	4月	197.2B	262.30B	164.34B
5/8	輸出(RMB建)(前年比)	4月	16.8%	14.3%	22.3%
5/8	輸入(RMB建)(前年比)	4月	29.3%	18.6%	26.3%
5/10	CPI(前年比)	4月	1.1%	1.2%	0.9%
5/10	PPI(前年比)	4月	6.7%	6.4%	7.6%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3650 ~ 1.4000
SGD/JPY 79.00 ~ 81.00

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

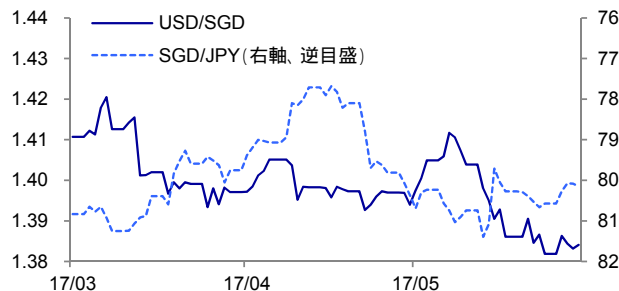
■ 先月の為替相場

5月のシンガポールドル(SGD)相場は、前半はSGD安に振れたものの、後半はSGDが反発し、7か月ぶり高値を更新。

月初1日はシンガポール休日の中、SGD1.39台後半でオープン。一旦1.39台前半へ下落するも、3日のFOMCの声明文が6月利上げの可能性に含みを持たせる内容だったため、発表後にドル買いの流れとなり、その後も連日ドルが上昇した。また5日に発表された米4月雇用統計は、6月利上げを支援するに十分な内容だったことから、ドルは堅調を維持。その中でSGDは5日に1.40台前半までSGD安となり越過した。翌週も前半はドル高の流れが継続。8日の海外市場でFRB要人によるタカ派的な発言相次いだことから、9日はアジア通貨が全面安となり、SGDも1.41台前半まで続落した。しかし、10日のシンガポール休日中に、トランプ米大統領が、突如コビーFBI長官を解任したことが嫌気されてドル買いの勢いが弱り、SGDも11日に1.41台前半の月中安値をつけた後は反発に転じた。更に12日、エバンス・シカゴ連銀総裁が「インフレ見通しが不透明なら、利上げは年内後1回でも構わない」と発言したことでSGDは1.40台前半まで続伸した。第3週も主要通貨が対ドルで大幅高となった影響でSGD堅調推移が続いた。15日はドイツの地方選挙における与党勝利を受けて欧州政治リスクが後退し、ユーロが1.10の節目に向けて上昇。16日は、トランプ大統領が機密情報をロシアに漏洩したとの報道を受けてドルが下落。17日以降もトランプ政権とロシアとの関係に関する情報が次々と報道され、トランプ大統領弾劾リスクや、景気刺激策実行の遅れへの懸念からドルが急落したが、特にユーロが1.10を突破して半年ぶりの高値を更新する中で、SGDも連日SGD高となった。19日には、ブラード・セントルイス連銀総裁による「3月の利上げ以降インフレは鈍化しており、年内後2回の利上げは積極的過ぎるかもしれない」との発言を受けてSGDは1.38台前半まで急伸した。第4週はSGD高値圏で揉み合い。22日のカプラン・ダラス連銀総裁の「年内残り2回の利上げは適切」との発言や、23日の英国の爆弾テロを受けたリスク回避、24日の中国のソプリング付けを引き下げなどを材料にSGDは1.39台前半まで反落した。しかし同夜公表されたFOMC議事要旨(5/2～3日分)の「景気減速が一過性であることを確認した上で利上げすることが適切」との表現を受けてドル売りが強まったことや、25日以降、介入観測から人民元が急騰する中で、SGDも26日には1.38近辺まで続伸し、7か月ぶり高値を更新した。その後は米国休日などから動意薄となり、1.38台前半で小動きとなった。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

6月のシンガポールドル(SGD)相場は、引き続きSGD堅調推移を予想。

シンガポール国内要因については大きな変化は見られない。セクターによってばらつきはあるものの、シンガポール経済は緩やかな景気回復基調にあり、インフレも上昇傾向が続いている。これらに鑑み、市場参加者はシンガポール金融管理局(MAS)が10月の通貨政策見直し時に緩やかなSGD高誘導を再開する可能性が高いと見ており、引き続きSGD下支え要因となる。

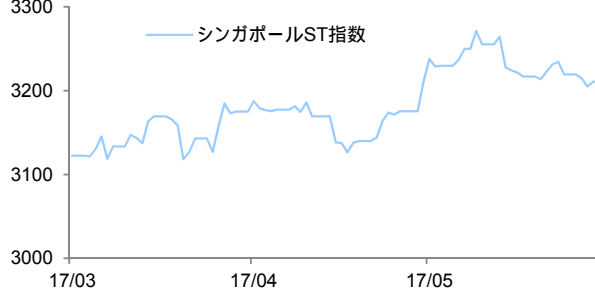
しかし、足許のSGDトレンドを左右しているのは、むしろ国外要因であろう。米国に関しては、トランプ大統領のロシア疑惑を受けて、景気刺激策実行への懸念が払拭できないことが、引き続きドルの重石となる他、最近の弱めの米国経済指標と政治不安を理由に米金融政策にも弱気な見方が増えている。13～14日のFOMCでは25bpの利上げが既定路線であるが、インフレ見通しが不透明な中での「自信のない利上げ」であれば市場の反応はドル売りとなる可能性もある。

SGD主要バスケット構成通貨である人民元、ユーロの動きも要注目である。人民元は資金流出が一服し、人民元高に向かい始めた局面で、ムーディーズが格付けを引き下げた。これに対して積極的な人民元買い介入が行われた模様で、当局の人民元相場安定維持への堅固な姿勢がうかがわれる。またユーロは政治リスクの後退を受けて急ピッチで上昇した。今後もこのペースでユーロ高が進むのは難しそうだが、弾みがついた相場であり、もう一段のユーロ高の可能性が無い訳ではない。ユーロ相場の材料としては8日の欧州中銀(ECB)理事会が注目される。

この様に、SGD相場は底堅い基調を維持し、1.38から1.40近辺のSGD高値圏で推移すると予想する。主要通貨や人民元などを取り巻く材料によっては1.36近辺へ向けても一段のSGD高となる可能性も含んでいると見る。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

シンガポールには多くのコンビニがあり、お酒や食料など必要なものは揃い、特段不満は無い。といっても先日一時帰国して日本のコンビニに久しぶりに入って違いに愕然。店内が明るく、店員の対応もキビキビ、そして魅力的な商品の数々。やはり全然違いました。しかし、当地で最近驚いたのは、自販機のようなものがレジ前に導入された事。品物を店員がPOSシステムで金額を計算した後、客はその機械にお金を直接入れるように言われる。入れるとお釣りが出てくる。正直まだ違和感が消えず、金額計算も支払いも完全セルフにするか全て店員にやってもらうかどちらかにしてもらいたいと思うが、これは過渡期でいずれ全てセルフになるのかもしれない。(高阪匡彦)

■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/2	購買部景気指数	4月	51.2	51.1	51.2
5/2	電子産業指数	4月	-	51.6	51.8
5/12	小売売上高(前年比)	3月	0.3%	2.1%	-2.6%
5/17	非石油輸出(前年比)	4月	13.0%	-0.7%	16.5%
5/23	CPI(前年比)	4月	0.5%	0.4%	0.7%
5/25	GDP(前年比)	1Q	2.7%	2.7%	2.5%
5/26	鉱工業生産(前年比)	4月	6.0%	6.7%	11.0%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 33.50 ~ 35.00
THB/JPY 3.20 ~ 3.33

バンコック資金室 山崎 浩幸

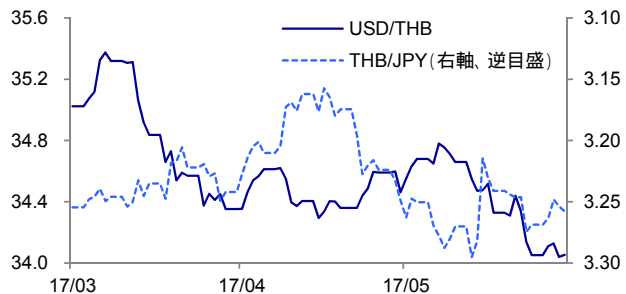
■ 先月の為替相場

○ドルバーツは軟調な展開

上旬は、ドルバーツは上昇。1日はメーデーで祝日となる中、34.60付近でのレンジ取引が続いた。休日明けの2日は、堅調なタイ経済を背景にバーツ高が進行、34.50を割り込み34.40台半ばへ到達。翌日もその流れが継続し一時34.40付近まで下落するも、FOMC声明文にて米経済成長の鈍化を一時的とし雇用情勢も堅調とみる見方が確認されるとドル高へ切り返した。翌4日もその流れが継続し、34.60付近まで値を戻す。その後は米雇用統計の発表を控えて様子見となった。5日、米雇用統計が良好な結果と受け止められ、ドル上昇の流れから34.70付近まで上昇するも、その水準では上値が重く34.60台半ばでの値動きが続いた。週明け8日、前週末の仏大統領選挙でマクロン氏が勝利するも相場への反応は限定的で34.60台半ばでの値動きが続いた。その後、FRBの理事らのタカ派発言からドル高が進むと、34.60台半ばへ上昇。翌9日に入ってもその流れが継続し、一時34.80付近まで上昇。翌10日はタイ休場により薄商いの中で34.70台後半での値動きが続いた。中旬、ドルバーツは軟調な展開。11日は、34.70台前半で推移し、翌12日に、米4月小売売上高や米4月コアCPIが市場予想を下回ったため34.60台へ下落。週明け15日、タイ国家経済社会開発委員会が発表した第一四半期GDPは前年同期比3.3%増となり、前四半期から伸びが加速したため、バーツ高が進行し34.50付近へ下げ幅を拡大。翌16日も前日の流れが継続し34.40台半ばまで下落したが、その水準では底堅く、34.40台後半で推移した。翌日はトランプ政権への不透明感が高まるも、影響は限定的で34.40台後半から、34.50付近での取引が続いた。18日も値動きは限定的となり、34.40台後半で推移。19日に入って、ロシアゲート問題を巡るトランプ大統領の弾劾懸念や、ブラードセントレイス連銀総裁のハト派発言によりドルが急落し、34.30付近へ下落。下旬、ドルバーツは下げ幅を拡大。翌週22日、バンコク市内での爆発事件もあり一時34.40付近まで上昇するも、貿易統計が堅調であったことも、再び下落に転じ34.30付近まで値を戻した。翌日、米金利が急騰したことで、34.40台半ばへ値を戻した。翌24日に開催されたMPCにおいて、政策金利の据置とともに、タイ経済が上向いていることが示されると、再び34.30付近へ下落。翌25日にはハト派寄りなFOMC議事録を背景に米金利低下し、一時的に34.00を割れの水準まで下落。26日は、34.00を付近で底堅い値動きが続いた。週が変わって月末週は34.00を目前に底堅く、34.10付近で推移した。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

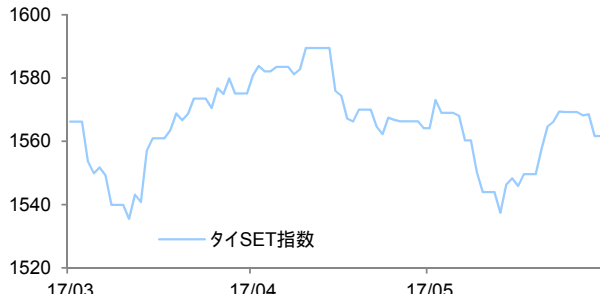
●ドルバーツは軟調な展開が継続か

タイ経済が足元は底堅い成長が継続しており、先行きの見通しについて楽観視する向きもあり、引き続き経済が好調に推移できる見通しであり、バーツ高圧力が相応に強いものと予想する。月末に発表された国際収支における経常収支も大幅に予想を上回る黒字を計上しており、安定した資金流入が認められる。一方、米国の足元経済は引き続き堅調に推移しているものと考えるが、一方でトランプ政権に対する、ロシアゲート等の疑惑が手かせ、足かせとなり先行きへの見通しが楽観とはいえない状況により、昨年末のトランプ相場によるドル買いは剥落し、既に米ドル売りに傾きつつある状況であることから、ドルバーツは軟調な展開が継続するものと予想する。また、6月14日・15日に予定されているFOMCでの利上げが既に織り込まれている中で、年内後1回の利上げをいつやるのかについて、どのような言及がなされるのかが次のポイントになろう。特段、次回の利上げに向けて明確なメッセージは無いものと予想するが、そうなれば、ドル売りが進行し、ドルバーツは33台半ば程度へ下落する可能性はありうるのではないかと。

円バーツは、ドルが売られる動きに、ドル円が円高となると予想される。その結果として、円高、バーツ高となることから、値動きは限定的となると思われるものの、円のほうがより強く高くなると予想され、円バーツはじり高の展開を予想する。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

タイのコンビニは一通りそろっており、日本のコンビニと比べて遜色がないと言った印象を受けます。おにぎりからサンドイッチまで一応存在します。日本との大きな違いは当然ですが、おにぎりの品揃えがほとんどないと言ったことでしょうか。しゃけ入りおにぎりくらいしか売ってないところがほとんどです。一方で、すべてのコンビニではありませんが、カフェや軽食が食べられるコンビニにも存在し、お酒やタバコも買えるところがほとんどです。また、日本のお菓子とかも普通に売っている場所もあり、コンビニは小売のお店がすくない(少なくともタイ語が読めない日本人)にとっては、本当に便利な存在だと思います。一方で、日本のコンビニにおいては近年、熾烈な競争が行われているスイーツについては、当地においても同様に品揃えが行われつつあるといった印象で、この点においてはまだまだと言った印象です。某コンビニはこのスイーツに力をいれている模様ですが、店舗数が少なく、なかなか街中で見つけることが難しいことは大変残念だと思います。一方で、当地のコンビニでは様々な料理が提供される店舗が存在します。食パンをトースターで焼いてくれたり、ガパオ(ご飯とスパイシーなひき肉のをいためたもの)がワンプレートに乗っているもの)が提供されたりと、小売店舗兼軽食屋さんといった店舗もあり、場所によって売っているものが異なるのも特徴かと思います。日本と異なり、ATMやトイレが無いように思いますが、その分当地ならではの点も十分見受けられます。

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/1	消費者物価指数(前年比)	3月	1.30%	0.76%	1.44%
5/1	CPIコア(前年比)	3月	0.62%	0.62%	0.59%
5/4	消費者信頼感	3月	-	76.8	75.8
5/15	GDP(前年比)	1Q	3.10%	3.30%	3.00%
5/22	自動車販売台数	4月	-	63,267	-
5/22	輸出(通関ベース/前年比)	4月	11.65%	8.49%	9.20%
5/22	輸入(通関ベース/前年比)	4月	15.60%	13.38%	19.30%
5/24	MPC	5/24	1.50%	1.50%	1.50%
5/31	経常収支	4月	\$1,010M	\$2,906M	\$2,576M

マレーシアリンギ相場

予想レンジ: USD/MYR 4.20 ~ 4.30
MYR/JPY 25.50 ~ 26.50

アジア・オセアニア資金部 宮地 崇

■ 先月の為替相場

先月のリンギ相場は1日が祝日の為休場、2日に4.33台半ばで取引を開始。序盤はリスクオンの地合いから新興国通貨が全般的に堅調に推移するなか、リンギも4.31台前半まで上伸。しかし、4日の米FOMCにて6月の利上げを織り込む向きが強まったことから、リンギは4.33台前半まで下落。5日にはOPECの減産延長交渉が不調に終わる可能性が報じられたことから、原油相場が軟調推移。この動きを嫌気しリンギは4.33台半ばまで続落した。

8日には、仏大統領選挙でのマクロン氏勝利を好感し、リスクオンモードに市場が傾斜するなか、アジア通貨にも買いが集まるとリンギは4.33台前半まで上昇。しかし、9日には米金利上昇に伴うドル買いの動きにリンギは4.34台半ばへ反落。10日のマレーシア休日を経て、11日には原油価格が下げ渋ったことが支援材料となり4.34台前半まで小反発した。その後、12日にはマレーシア中銀の金融政策決定会合にて政策金利の据え置きが決定されたが、事前予想であったこともあり、相場への影響は限られ4.34台半ばで越週した。

月半ばに入り、サウジアラビアとロシアが原油の協調減産を来年3月まで延長すべきとの意見で一致したことが明らかになると、原油価格の上昇に連られてリンギも上昇。また、マレーシア中銀が2016年下期以降の成長は2017年1～3月期に強まり、年内は持続することが見込まれると表明したことも手伝いリンギは4.31台前半まで続伸した。その後は、トランプ米大統領の機密情報漏えい疑惑から、リスクオフモードとなりリンギは4.33台前半まで軟化。しかし、19日発表されたマレーシア1～3月期GDPが前年比+5.6%と大きく改善すると、リンギは4.32台前半まで買い戻された。

月後半には、23日にOPEC総会で協調減産の延長が合意されるとの期待感が強まるなか、原油価格の上昇を背景にリンギは4.29台近辺まで上伸。一旦、英国でのテロ影響から4.30台まで小反落するも、25日には、前日公表されたFOMC議事要旨で市場予想ほどタカ派スタンスが示されなかったことからドル売りが優勢となり、リンギは4.27台前半まで上昇。その後もじりじりと値を上げるなか、一時4.26台後半を示現した。

■ 今月の見通し

先月発表されたマレーシア1～3月期GDPは前年比+5.6%と予想を大きく上回り、2年ぶりの高水準となった。引き続き、民間消費が景気を牽引したことに加え、民間投資も下支え。さらに、前回不調であった政府消費も増加しており広範囲な景気拡大が確認された格好。また、3月のマレーシア輸出額は3か月連続の増加を実現するなど昨年後半からの輸出の回復基調は着実な足取りを示している。加えて、鉱工業生産についても前年の同時期に比べて強い内容が確認されており、総じてマレーシア経済の環境は良好、リンギに対してポジティブな材料となりそうだ。

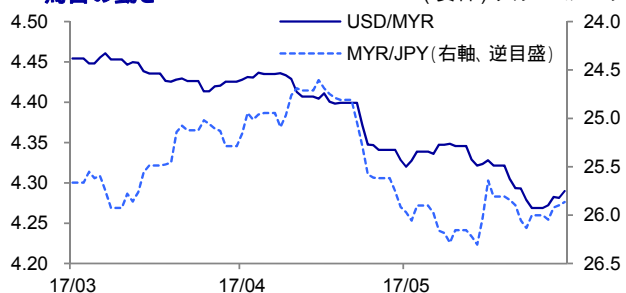
さらに、マレーシア金融当局は4月中旬に海外投資家に対する規制緩和を実施。これに伴い、海外投資家のマレーシアへの投資が再開されつつあり、少なくとも従来のようなリンギが一方に売られる展開となる可能性は低下した。また、マレーシア長期国債や政府投資証券等の長期国債の大型償還は8月以降まで見当たらず、こちらもリンギ売り圧力を緩和する要因となろう。

一方、海外環境については不透明感が漂う。まず、トランプ米大統領の政治混乱の影響は基本的に新興国通貨には下押し材料となる公算が大きい。しかしながら、6月以降の米FRBの利上げについては、足許はやや利上げペースの鈍化も危惧されており、ドル売りを招来するシナリオも残る。加えて、トランプ米大統領のドル高牽制姿勢はドルを買い進めづらい地合いを醸成しており、直近の状況を踏まえると外的要因はややドル安方向か。

上記の材料を勘案すると、今月は基本的にリンギが強含む相場になると予想する。

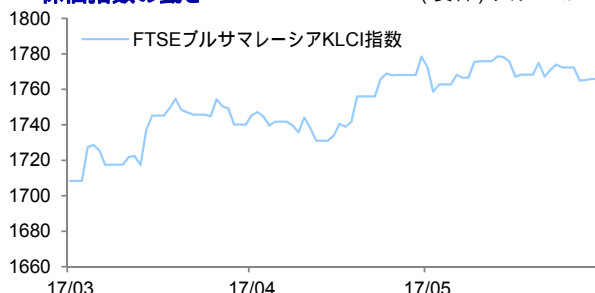
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/5	輸出 (前年比)	3月	20.0%	24.1%	26.5%
5/5	輸入 (前年比)	3月	28.6%	39.4%	27.7%
5/5	貿易収支 (MYR)	3月	9.35b	5.41b	8.71b
5/11	鉱工業生産 (前年比)	3月	4.8%	4.6%	4.7%
5/12	BNM翌日物政策金利		3.00%	3.00%	3.00%
5/17	消費者物価指数(前年比)	4月	4.5%	4.4%	5.1%
5/19	GDP(前年比)	1Q	4.8%	5.6%	4.5%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	13100	~	13600
IDR/JPY	0.79	~	0.87
JPY/IDR	115.00	~	125.90

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

■ 先月の為替相場

5月のドル/ルピアは、13280～13420のレンジでの取引となり、月前半堅調な展開も、月後半、S&Pによるインドネシア格上げを受けて、急落する展開。

月前半、13325近辺でスタートしたドル/ルピアは、2日発表されたインドネシア4月CPIが前年比+4.17%と前月を上回るも、相場の影響は限定的。その後、8日にインドネシア4月外貨準備高が発表され、堅調な増加が確認されたが、米国の政治不安を背景としたルピア売り圧力に押され、やや上昇する場面も見られ、一時13365をつけた。

月半ば、12日に発表された2017年1～3月期経常収支は、予想を上回る水準となったが、2016年10～12月期に続く経常収支の赤字幅縮小と、15日発表の4月貿易収支で、16か月連続の黒字が確認されると、ルピアが買われ、一時13280までドル/ルピアは下落した。

その後、米国政治不安から、19日には、反転上昇、一時13420をつけたドル/ルピアが、同日に、S&Pによるインドネシア格付けを投資適格となる「BBB-」への引き上げを発表(フィッチ・レーティングスとムーディーズは、既に投資適格を付与)すると、旺盛な海外からの資金流入により、ドル/ルピアは急落し、再び13280をつけた。

その後、月末ドル買い需要もあり、5月29日現在(終値)、13320近辺での取引となっている。

17・18日に行われたインドネシア中央銀行の月例会合では、米金融政策など国内外のリスクに配慮する必要がある、として7か月連続で政策金利を据え置いた。

■ 今月の見通し

今月のドル/ルピアは、引き続き、ルピア堅調地合いの中、メインシナリオとして、13200～13400をコアレンジとした狭いレンジ取引を予想する。

過去、本欄にて、その可能性について言及していたが、S&Pによるインドネシア格付けの投資適格への引き上げが、19日発表された。

年初来、海外投資家のインドネシア証券への投資は、順調に増加していたため、更なる投資増にはもう一段の材料が必要な状況であった。その中でS&Pによるインドネシア格上げのニュースは、ルピアの強力なサポート材料になるだろう。

また、前月発表されたインドネシア1～3月期GDPは、民間消費にやや力強さを欠いたものの5%台を維持、経常収支の赤字幅は、2016年10～12月期からはやや増加したが、それ以前の水準と比較すると、赤字額は減少(2016年7～9月期:▲50億ドル、2016年10～12月期:▲21億ドル、2017年1～3月期:▲24億ドル)していることが確認されている。

今月は、対外要因では、6月15日早朝に発表が予定されている米FOMCの結果に注目が集まるが、市場はほぼ利上げを織り込んでおり、相場への影響は限定的と見ている。また、北朝鮮等の地政学リスクの高まりを勘案すれば、リスクオフからのルピア安の可能性は上昇しているが、上記同様、相場への影響は限定的と見ている。

以上より、ドル/ルピアはルピア健康な地合いが継続すると予想する。

一方で、13300近辺で、中銀介入の憶測もあり、下値追いは限定的と見ている。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

インドネシアでは、日本でも見られるコンビニが、数多く出店されています。

私の在任中に一番困ったのは、「ある一定規模の面積のない店では、お酒(主にはビールですが)を販売してはいけない」という規制が、始まった時です。

この時から、コンビニの店頭から、一斉にビールが姿を消しました。

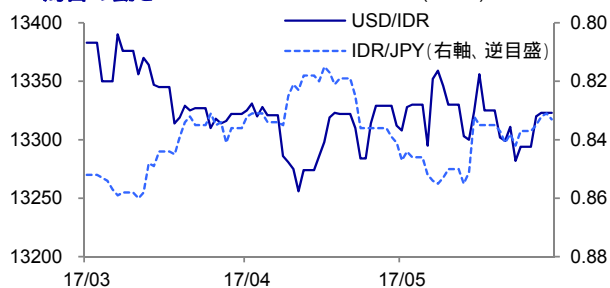
仕事後の晩酌を唯一の趣味とする私にとっては、死活問題。

妻からの「ビールないから、適当に買ってきて。」に対応することができず、常時、家のビールストックを確認し、底が見えてくると、休日を活用し、大型店舗に買いだめに行く。という生活を強いられました。

随分「コンビニ」から脱線してしまいましたが、非常に苦労したのを覚えております。家での晩酌を止めれば？という声は、当然、私には届きませんでした。

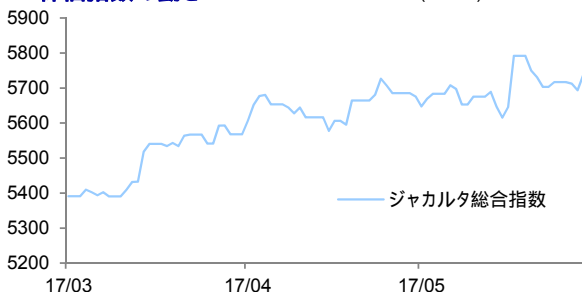
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/2	CPI(前年同月比)	4月	4.10%	4.17%	3.61%
5/5	GDP(前年比)	1Q	5.10%	5.01%	4.94%
5/8	外貨準備高(USD B)	4月	-	123.3	121.8
5/12	経常収支(USD M)	1Q	-1,923	-2,397	-2,099
5/15	輸出(前年比)	4月	20.35%	12.63%	24.29%
5/15	貿易収支(USD M)	4月	946	1,238	1,395
5/18	BI 7daysリバースレポ金利		4.75%	4.75%	4.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ:	USD/PHP	49.40	~	50.40
	PHP/JPY	2.20	~	2.25

マニラ支店 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

ドルペソ(オンショア・インターバンク市場)為替相場は、1ドル=50.11で取引開始。
北朝鮮の地政学リスク、米金利上昇に支えられてドル買い圧力は根強く、3日のFOMCの声明では、米景気の先行き懸念が後退したが確認され、一段のペソ安が予想された。

しかしながら、急激なペソ安を防衛する当局の動きが意識され、上値は異常に重く、じりじりと値を切り下げ、週初は1ドル=50ペソ手前での取引。結果的に始値が月の高値となりそうだ。

米4月雇用統計は強い数字となり、ドル買いペソ売り材料に。一方、7日のフランス大統領選挙で親EU派のマクロン氏が当選したことで欧州政治リスクは後退、こちらはペソ買い材料となり、方向感を探る展開に。

蒸し返される地政学リスクとFRBメンバーからの米金利に対するタカ派発言でドルペソは上値トライも、1ドル=50ペソ丁度からは当局の介入と思しきドル売りに戻される展開に。

月央は、悪材料消化で、市場センチメントが改善、フィリピン株式指数が一時8,000ポイント台に上昇。外国人の株買いも戻り始め、また、15日に発表されたOFW(海外在留フィリピン人労働者)送金額が市場予想を上回ったことや、比第1四半期GDPが大きく上触れるとのマーケット期待が先行してペソの買戻しが進み、一時1ドル=49.65ペソで取引された。

比第1四半期GDPは期待外れとなり、トランプ大統領を巡る政治リスクが嫌気され、また、フィリピン南部のミンダナオ島に戒厳令が発令されると再びドルペソは1ドル=50ペソ丁度までドルが買われたが、上値がキャップされると、FOMC議事録の米金利に対してハト派表記に市場は反応し、アジア通貨が買われる流れで1ドル=49ペソ後半で揉み合いとなっている。
(30日16時現在)

■ 今月の見通し

先月は材料山盛り、忙しい月だったような気がする。
欧州の政治リスク、北朝鮮の地政学リスク、米金利が右往左往(というのは言い過ぎか)、インドネシアの格上げ、中国の格下げ、ミンダナオ島の戒厳令布告など。

しかしながら値動きは限定的で、もっと動きがあってもよかったというのが率直な感想。
まず上値はどうしようもなく重い。当局の介入が相当意識されており、1ドル=50ペソ丁度、直近高値50.40ペソをブレイクするには相当な材料とパワーが必要と思われる。
さて、ドルペソの下値はどうかというと、ペソが買える材料が増えてきた印象。戒厳令は、首都マニラから離れているミンダナオ島であることから影響限定的、市場は織り込み済みとっていいだろう。フィリピン株式市場も4月からの上昇基調が維持出来ており、外国人の資金流出は見られていないことからペソの買い戻しが進みやすい地合。

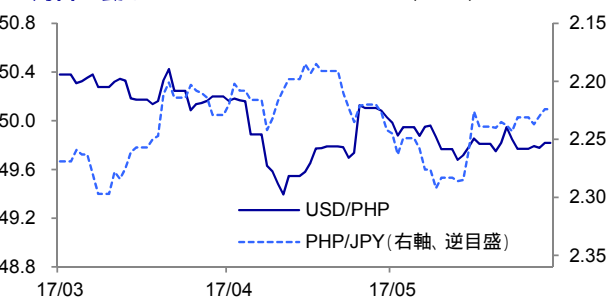
比第1四半期GDPは6.4%で2015年第3四半期以来の低い伸びにとどまったが、高水準を維持、ドゥテルテ政権下の税制改革、インフラ整備加速による民間投資、消費拡大は期待出来よう。

比3月貿易統計は輸出が前年同月対比で21%の伸びをみせる一方、輸入も同24%増を記録、貿易赤字幅は先月の17.3億ドルから拡大し23億ドルとなった。一方、4月の国際収支は前月の赤字から黒字に転じている。
また、3月OFW(海外在留フィリピン人労働者)送金は過去最大を記録。市場がモメンタム継続に自信を持てばペソ買い(買い戻し)圧力が強まりそうだ。

ペソ高バイアスが増えてきたものの、米金利の先高観、リスクオフによるドル買い需要でトレードオフとなりそう。今月は1ドル=50ペソを挟んでの揉み合いを予想。
(30日16時現在)

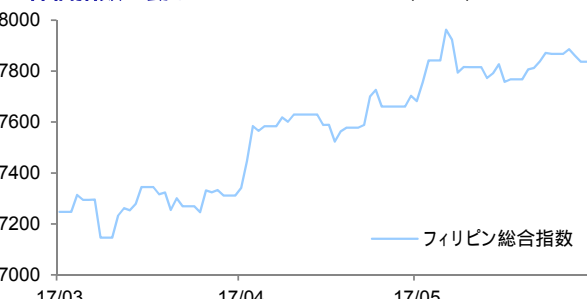
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
上記ご参照	

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
----	----	----	----

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 64.00 ~ 65.30
INR/JPY 1.67 ~ 1.77

アジア・オセアニア資金部 田川 順也

■ 先月の為替相場

【5月の米ドル/インドルピーは一旦上昇するも勢い続かず】

当月のドル/インドルピーは64.13近辺でオープン。当初はインドの海外投資家向け規制の緩和を受けやルピーが買われるも、米FOMC声明文にて「第一四半期の景気鈍化は一時的」との文言が確認されると6月の利上げ観測が一段と高まり米ドルが買われる展開。ただし、SENSEXが市場高値を更新する流れにルピーも一旦買い戻され、当月のドル/ルピーの安値である64ちょうど近辺をつける。

月半ば以降は北朝鮮核問題及びトランプ大統領のロシアゲート問題からリスク回避的なムードが先行し、アジア通貨全体が売られるとドル/ルピーは64.97を一時的に超える。上昇一服後はやや調整を挟む場面こそあったが、イギリスでのテロを受け再びアジア通貨売りとなるとドル/ルピーも高値圏での推移となる。

月末にかけては公表されたFOMCの議事録がハト的とも受け取られる内容に、米ドルが軟調となり、26日クローズを64.44レベルで迎えた。

【5月のインドルピー/日本円は上昇後下落した】

1.74レベルで当月のルピー/円は5月の取引をスタート。ドル/ルピーが小動きとなる中、フランス大統領選挙や原油が堅調推移となるとドル/円が114円台をつける場面でルピー/円も1.77超えを示現。ただし、既述の通りリスク回避要因が並ぶ中で月後半以降は円買いが主導し、ドル/円が110円台前半まで急落し、ルピー/円も当月の安値である1.70ちょうど近辺まで下押し。その後は一段の下値追いこそ避けられたが安値圏での推移となり、1.72レベルで26日クローズを迎えた。

■ 今月の見通し

【6月の米ドル/インドルピーは軟調な展開を予想】

当月のインド経済指標を振り返ると、製造業PMIが前月に並ぶ高水準を維持。内容としても新規受注が半年ぶりの水準まで上昇。輸入統計ではコア輸入が6年半ぶりの上昇を示し、内需の旺盛さを示唆。CPIについては食料品主導で2.99%まで下落したが、モンスーンの影響から豆類が67年ぶりの水準の高生産とも言われておりCPI内訳の野菜項目は前年比▲8.6%となっている。デモネタイゼーション(高額紙幣の廃貨)とは別の要因の存在が伺われる。5/31に発表される第1四半期GDPの結果が7.0%前後に収まるのであれば、印中銀が何度も繰り返している「デモネタイゼーションの影響は短期的」との説明が裏付けられる結果となり、政策運営は引き締め方向が肯定されることになるだろう。

一方で揺れる米政局については大統領弾劾は避けられるものの、インフラや減税案が遅延するとの観測もあり、投資家たちのマインドを圧迫している。また、本件が上手く消化されたとして、ドル安を好むと言ったトランプ大統領の考えは容易に変わることはないだろう。米国は利上げが予想されているが、6月利上げについては既に既定路線としてマーケットに織り込み済みであり、このイベントに過度なドル高を期待するのは無理筋であろう。

ファンダメンタルズ的にはドル安/ルピー高が支援されるものの、先月までのルピー高傾倒のスピードが速かったことから、印中銀はスモーキング介入(ドル買/ルピー売)を行っているものとみられ、短期的には64ちょうどは守られるものとみる。総じて現水準で方向感のつかない展開を想定している。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のコンビニ事情』

バンガロールを含むインドの都市では、10年ほど前からスーパーマーケットは普及したものの、国際的なコンビニチェーンはまだ進出していない。繁忙期のランチをコンビニのパン・サラダ・おにぎりで済ませていた東京での生活を懐かしく思い出し、時には出張者から「コンビニは無いんでしょうか」と尋ねられて返答に詰まる。

しかし、インドに昔からあるスタイルの「何でも屋」は特筆すべき存在だ。我がアパートの中に一軒ある典型的な店舗について述べると、押入れほどのスペースの床から天井までが棚で、内部には店主の中年男性が一人で立つ。客は店の外側から中をのぞいて、「ヘアピン1箱」「消しゴム1つ」「蚊取り線香」などと欲しいものを店主に告げて取ってもらうのだ。ちょうど、日本の駅のキオスクのような仕組みと言ったらいいたろうが、品揃えが家庭用品・文具店・玩具店を合わせたように膨大だ。

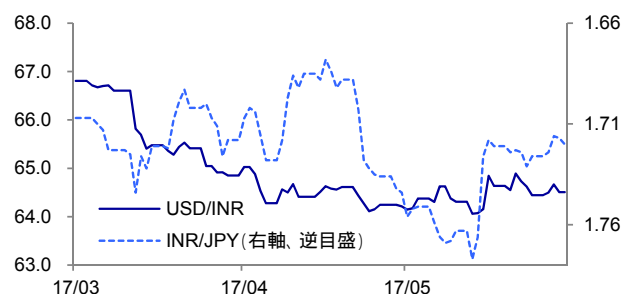
驚くべきことに、この店にはコピー機も備わっている。原稿を渡して「20部、両面をお願いします」などと依頼すれば、ホチキス留めされたコピーがきちんと出来上がる。日本のコンビニのコピーがセルフサービスで、失敗作にも課金されることを考えると、こちらの方が優れたサービスだと思う。しかも1枚1ルピーか2ルピー(約3円)という安さには申し訳なさすら覚える。

店主の食事時にはシャッターが閉められるし、時には子どもたちが群がっていて近づけないこともあるが、そんな時はチャイ屋にでも行っのんびりお茶を飲んで出直すのが吉だ。

(バンガロール支店 木原志乃)

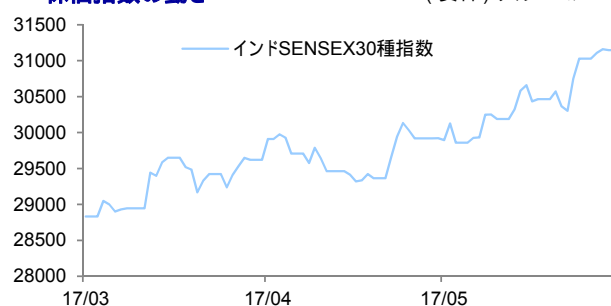
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5/2	日経インドPMI製造業	4月	-	52.5	52.5
5/4	日経インドPMIサービス業	4月	-	50.2	51.5
5/12	鉱工業生産(前年比)	3月	1.9%	2.7%	1.9%
5/12	消費者物価指数(前年比)	4月	3.30%	2.99%	3.89%
5/15	卸売物価(前年比)	4月	4.55%	3.85%	-
5/15	輸出(前年比)	4月	-	19.8%	27.6%
5/15	輸入(前年比)	4月	-	49.1%	45.3%

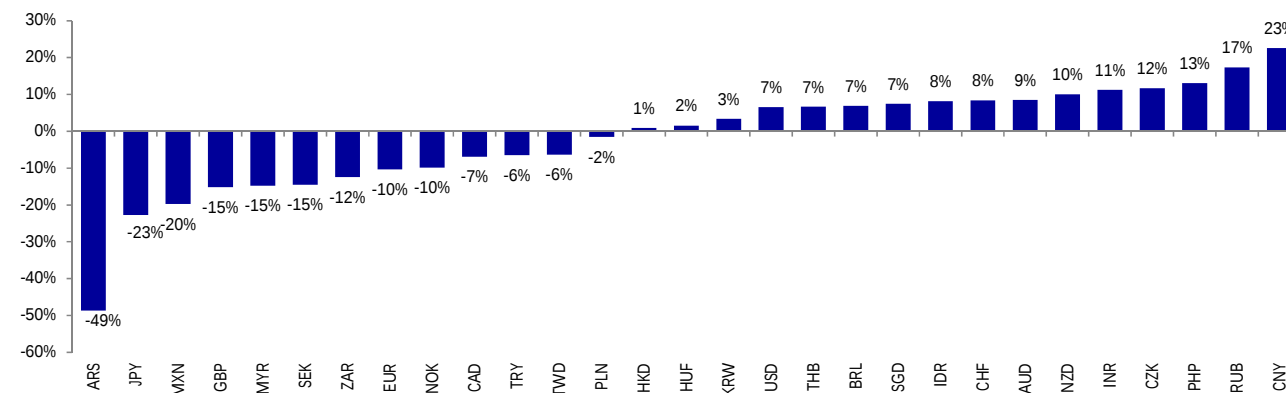
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2016年末	2017年5月末	騰落率	株式市場	2016年末	2017年5月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	19762.6	21008.65	6.3%	-
日本	USD/JPY	116.96	110.78	-5.3%	日経平均株価	19114.37	19650.57	2.8%	8.5%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0517	1.1244	6.9%	ドイツDAX指数	11481.06	12615.06	9.9%	9.9%
英国	GBP/USD	1.234	1.289	4.5%	ロンドンFTSE100指数	7142.83	7519.95	5.3%	0.8%
豪州	AUD/USD	0.7208	0.743	3.1%	S&P/ASX200指数	5665.8	5724.572	1.0%	-2.0%
カナダ	USD/CAD	1.3441	1.35	0.4%	S&Pトロント総合指数	15287.59	15349.91	0.4%	0.0%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.945	6.818	-1.8%	上海総合	3103.637	3117.178	0.4%	2.3%
香港	USD/HKD	7.7559	7.7921	0.5%	香港ハンセン	22000.56	25660.65	16.6%	16.1%
インド	USD/INR	67.9238	64.5075	-5.0%	インドSENSEX30種	26626.46	31145.8	17.0%	23.2%
インドネシア	USD/IDR	13473	13323	-1.1%	ジャカルタ総合	5296.711	5738.155	8.3%	9.6%
韓国	USD/KRW	1205.83	1119.65	-7.1%	韓国総合株価	2026.46	2347.38	15.8%	24.8%
マレーシア	USD/MYR	4.4862	4.2813	-4.6%	ブルサマレーシアKLCI	1641.73	1765.87	7.6%	12.7%
フィリピン	USD/PHP	49.6	49.819	0.4%	フィリピン総合	6840.64	7837.12	14.6%	14.1%
シンガポール	USD/SGD	1.4468	1.3832	-4.4%	シンガポールST	2880.76	3210.82	11.5%	16.6%
台湾	USD/TWD	32.326	30.124	-6.8%	台湾加権	9253.5	10040.72	8.5%	16.4%
タイ	USD/THB	35.835	34.04	-5.0%	タイSET	1542.94	1561.66	1.2%	6.6%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2017年4月時点)



(資料) BIS

■ 実質GDP成長率

	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2015	2016
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.0	0.9	0.8	1.4	3.5	2.1	1.2	2.6	1.6
日本*	0.6	-1.0	2.6	1.7	1.0	1.4	2.2	1.1	1.1
ユーロ圏	1.9	2.0	1.7	1.6	1.8	1.8	1.7	2.0	1.8
英国	1.8	1.7	1.6	1.7	2.0	1.9	2.0	2.2	1.8
豪州	2.4	2.5	2.5	3.1	1.9	2.4		2.4	2.5
カナダ*	2.3	0.5	2.8	-1.4	4.2	2.7	3.7	1.0	1.5
エマージングアジア									
中国	6.9	6.8	6.7	6.7	6.7	6.8	6.9	6.9	6.7
香港	2.3	1.9	1.0	1.8	2.0	3.2	4.3	2.4	2.0
インド	8.4	7.4	9.2	7.9	7.5	7.0	6.1	8.0	
インドネシア	4.8	5.2	4.9	5.2	5.0	4.9	5.0	4.9	5.0
韓国	3.0	3.2	2.9	3.4	2.6	2.4	2.7	2.8	2.8
マレーシア	4.7	4.6	4.1	4.0	4.3	4.5	5.6	5.0	4.2
フィリピン	6.4	6.7	6.9	7.1	7.1	6.6	6.4	6.1	6.9
シンガポール	2.1	1.3	1.9	1.9	1.2	2.9	2.7	2.0	2.0
台湾	-0.7	-0.8	-0.2	1.1	2.1	2.8	2.6	0.7	1.5
タイ	3.0	2.7	3.1	3.6	3.2	3.0	3.3	2.9	3.2

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	16/10	16/11	16/12	17/01	17/02	17/03	17/04	2015	2016
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.8	4.6	4.7	4.8	4.7	4.5	4.4	5.3	4.9
日本	3.0	3.1	3.1	3.0	2.8	2.8	2.8	3.4	3.1
ユーロ圏	9.8	9.7	9.6	9.5	9.4	9.4	9.3	10.9	10.0
英国	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7	4.6		5.4	4.9
豪州	5.6	5.7	5.8	5.7	5.9	5.9	5.7	6.1	5.7
カナダ	7.0	6.8	6.9	6.8	6.6	6.7	6.5	6.9	7.0
エマージングアジア									
中国			4.0					4.1	4.0
香港	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2	3.3	3.4
インドネシア					5.6			6.0	5.6
韓国	3.8	3.6	3.5	3.6	4.0	3.7	4.0	3.6	3.7
マレーシア	3.5	3.4	3.5	3.5	3.5	3.4		3.2	3.5
フィリピン	4.7			6.6				6.3	5.5
シンガポール			2.2					1.9	2.1
台湾	3.9	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9
タイ	1.2	1.0	0.8	1.2	1.1	1.3	1.3	0.9	1.0

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	16/11	16/12	17/01	17/02	17/03	17/04	17/05	2015	2016
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	1.7	2.1	2.5	2.7	2.4	2.2		0.1	1.3
日本	0.5	0.3	0.4	0.3	0.2	0.4		0.8	-0.1
ユーロ圏	0.6	1.1	1.8	2.0	1.5	1.9	1.4	0.0	0.2
英国	1.2	1.6	1.8	2.3	2.3	2.7		0.0	0.7
豪州		1.5			2.1			1.5	1.3
カナダ	1.2	1.5	2.1	2.0	1.6	1.6		1.1	1.4
エマージングアジア									
中国	2.3	2.1	2.5	0.8	0.9	1.2		1.4	2.0
香港	1.2	1.2	1.3	-0.1	0.5	2.0		3.0	2.4
インド	3.6	3.4	3.2	3.7	3.9	3.0		5.9	5.0
インドネシア	3.6	3.0	3.5	3.8	3.6	4.2		6.4	3.5
韓国	1.5	1.3	2.0	1.9	2.2	1.9	2.0	0.7	1.3
マレーシア	1.8	1.8	3.2	4.5	5.1	4.4		2.1	2.1
フィリピン	2.5	2.6	2.7	3.3	3.4	3.4		1.4	1.8
シンガポール	0.0	0.2	0.6	0.7	0.7	0.4		-0.5	-0.5
台湾	2.0	1.7	2.2	-0.1	0.2	0.1		-0.3	1.4
タイ	0.6	1.1	1.6	1.4	0.8	0.4		-0.9	0.2

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2015	2016
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.5	-2.5	-2.6	-2.7	-2.6	-2.6		-2.6	-2.6
日本	2.8	3.1	3.4	3.5	3.6	3.8	3.8	3.1	3.8
ユーロ圏	3.2	3.2	3.3	3.5	3.5	3.4		3.2	3.4
英国	-4.3	-4.3	-4.5	-4.7	-5.1	-4.4		-4.3	-4.4
豪州	-4.8	-5.6	-3.6	-3.7	-2.4	-0.9		-4.7	-2.7
カナダ	-3.3	-3.4	-3.4	-3.5	-3.6	-3.3	-3.1	-3.4	-3.3
エマージングアジア									
中国	2.7	2.8	2.5	2.4	2.4	1.8	1.5	2.8	1.8
香港	3.2	3.3	3.9	4.5	4.3	4.6		3.3	4.6
インド	-1.1	-1.1	-1.1	-0.8	-0.5	-0.6		-1.1	-0.6
インドネシア	-2.2	-2.1	-2.1	-2.1	-2.1	-1.8	-1.5	-2.1	-1.8
韓国	7.6	7.7	7.9	7.9	7.2	7.0		7.7	7.0
マレーシア	2.5	2.9	2.4	1.9	1.9	2.1	2.0	2.9	2.1
フィリピン	3.3	2.5	2.1	1.1	1.0	0.2		2.5	0.2
シンガポール	18.9	18.1	17.2	18.8	19.5	19.0	19.7	18.1	19.0
台湾	14.1	14.4	14.1	14.3	13.7	13.5	12.7	14.4	13.5
タイ	7.2	8.1	10.2	11.0	11.9	11.3	10.0	8.1	11.3

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.75 - 1.00	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2017/3/15	25	2017/5/4	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2017/4/27	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2017/4/27	現状維持
英国	バンク・レート	0.25	緩和: 2007/12/6	5.75	2016/8/4	-25	2017/5/11	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2017/5/2	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2017/5/24	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レボ金利	6.25	緩和: 2015/1/15	8.00	2016/10/4	-25	2017/4/6	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.75	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/10/20	-25	2017/5/18	現状維持
韓国	7日物レボ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2017/5/25	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2017/5/12	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2017/5/11	現状維持
タイ	翌日物レボ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2017/5/24	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行